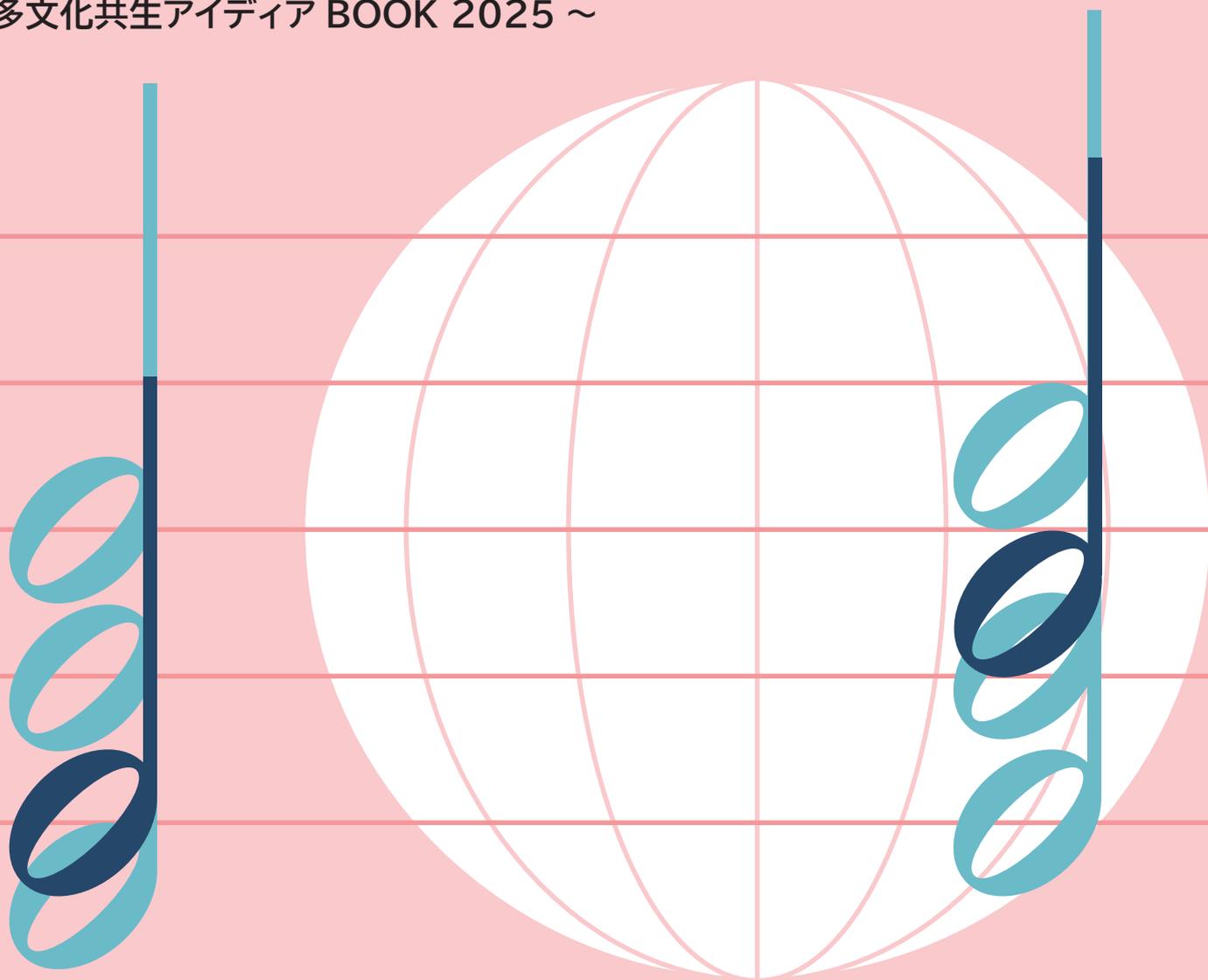


誰もが 自分を発揮できる 学校づくり

～多文化共生アイデア BOOK 2025～



誰もが自分を発揮できる学校づくり ～多文化共生アイデア BOOK 2025～

「誰もが自分を発揮できる学校づくり ～多文化共生アイデア BOOK 2025～」(以下本冊子)は、2025年度 JICA「多文化共生の文化」共創プログラムの参加者が、自身の経験や知見、さらに本プログラムから得た学びをもとに、今後取り組みたい活動を考え、そのアイデアをまとめたものです。本冊子は、教室・学校および地域で必要とされている、多文化共生に向けた取り組みのために活用されることを目的としています。

目次

ファシリテーターメッセージ	2
「多文化共生の文化」づくりのための活動アイデア集一覧(校種別索引)	5
「多文化共生の文化」づくりのための活動アイデア集	8
2025年度 JICA 教員研修「多文化共生の文化」共創プログラムレポート	72
付録	
多文化共生のための参考文献・教材・資料リスト	81
教育現場で活用できる JICA のツール	90
オンライン出前講座	91
JICA 地球ひろば	92
11 か国の教育制度・学校文化ガイド集	93

「多文化共生の文化」共創プログラムについて

ファシリテーターメッセージ

「誰もが自分を発揮できる学校づくり～多文化共生アイデア BOOK～」

誰もが自分を発揮できる学校はいかにして作られるのでしょうか？
教員の皆さまはもちろん、教育関係者の方や保護者の方、様々な方が問い続けてきたことだと思います。

この多文化共生アイデア BOOK は、「多文化共生の文化共創プログラム」において、全国各地から集まった16名の先生方が、誰もが自分を発揮できる「多文化共生の文化」を言語化し、その文化を生み出すために何ができるかを形にしたアイデア集です。

この本の読み方は、自由です。5ページにある「多文化共生の文化」づくりのための活動アイデア集一覧（校種別索引）から興味のある校種を選んで読み始めていただいても良いですし、ご自身の地域に近い場所から読んでいただくのも良いでしょう。また、学校の背景を読んでいただき、興味を持たれたところから読み進めていただくこともできます。

あるいは、研修で参加者がどのような体験をし、どのような対話が行われたのかを知りたい方は、72ページの『多文化共生の文化』共創プログラムレポートからご覧ください。

この研修では、以下の三つの問いをもとに、参加者同士による深い対話が重ねられました。

Q1. なぜ、今、多文化共生の文化が必要とされているのか？

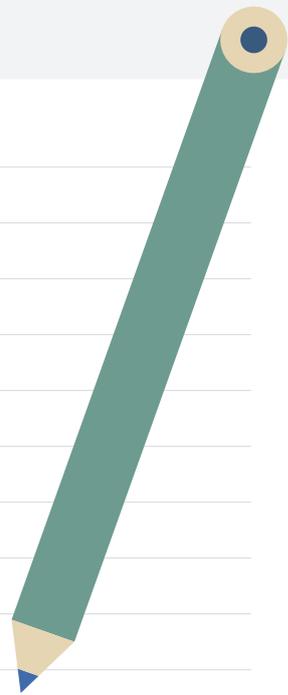
自分にとって

学校にとって

社会・世界にとって

Q2. 私たちが共創したい多文化共生の文化とは何か？

Q3. 多文化共生の文化を共創するために、やってみたいことは何か？（アイデア・アクション）



この大きな問いと向き合うにあたり、自己との対話や他者との対話を起点に、アイデアやアクションの共創、そして、実践・参画へと段階的に進む「地球志民プロセス」に沿って研修を行いました。

地球志民

Global Citizenship

STEP1

自己を知る、
受け入れる

文化・習慣・価値観など
多様性に向き合う
「自分」に気づく



STEP4

社会に参画し、
還元する

自分の役割を持って社会と関わり、
自分の経験を社会に還元 (GiFT)する



STEP2

相手を知る、
受け入れる

相手の持つ異なる視点、
価値観を理解し、
共感する



STEP3

共に取り組み、
創る

様々なメンバーと共に
テーマに取り組み、
アイデアを共創する



地球志民プロセス

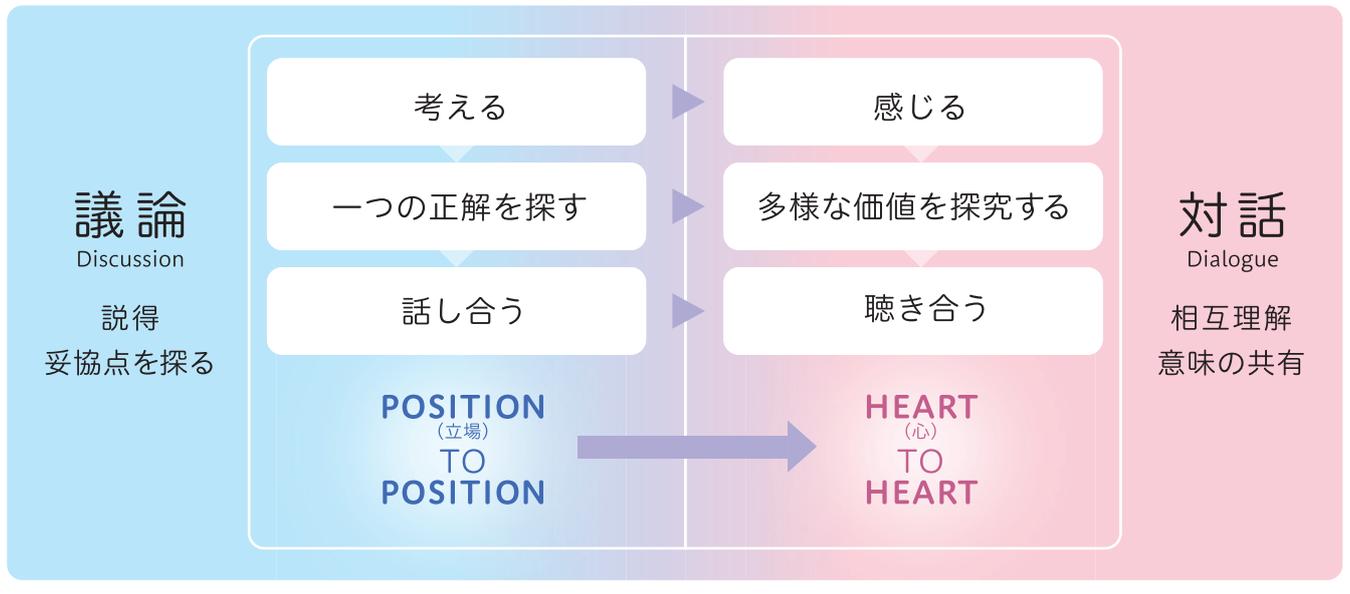
表面的な課題解決ではなく、自身にとって、また私たちにとって、なぜ大切なのか、何に価値があるのかを、ともに探究していきました。

今回のプログラムの軸になる、先生方同士の「対話」の時間においても、次の考え方のもとに、互いに聴き合い、尊重し合うことを重視して進めていきました。

対話 (ダイアログ)

対話 (ダイアログ) とは

お互いの価値観の「重なり」と「違い」を積極的に見出し、理解に努め、敬意を払い、相互に深い気付きと洞察を得ようとするコミュニケーション



2023年、世界の目指すべき教育の方向性が示された「ユネスコ教育勧告」が、1974年に採択されて以来、50年ぶりに改定されました。その文書においても、「多様性の尊重」が学習目標の一つに掲げられました。その主導原則として、差別的でないことや、公平・包摂的・多様性を尊重すること、そして、コンヴィヴィアル（和気藹々）な関係性を育むために、思いやりや連帯の倫理を促進することなどが示されています。

こうした教育の潮流の中、私たちは一体、何から始めたらいいのでしょうか。状況や環境が地域や学校によって異なる中、16名の先生方がそれぞれの現場に向き合い、探究し、また、先生同士で対話を深めながら、アイデアを形にしてくださいました。

ぜひ、上記のワークをご自身でも行ってみてください。そして、16名、16通りの探究やアイデアを読みながらご自身と重ね合わせ、ご自身の「多文化共生の文化」を生み出すヒントを見だし、そして仲間と語り合い、ともにその文化を創り出す機会になれば幸いです。

大きな問いに向き合ってくださいました先生方に心から感謝するとともに、読者の皆さまのより良い学校・社会づくりの、ワクワクとした一歩につながりますように。

プログラムデザイン・ファシリテーター
一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GiFT) 代表理事
辰野まどか

「多文化共生の文化」づくりのための活動アイデア集一覧（校種別索引）

本冊子に収録されている活動アイデアは、校種別に整理されています。タイトルや学校背景を手がかりに、教室・学校・地域での取り組みを検討する際の参考としてご活用ください。

ページ数

タイトル

所属先

執筆者氏名

学校背景

● 小学校 ● 中学校 ● 高等学校 ● 高等専門学校

08

エンパワーメントと共生していく居場所づくりを目指して

栃木市立栃木中央小学校 仲尾 望

「外国につながる児童」数は約30名で、半数が日本語指導の支援を受ける。南アジアや中南米出身児童が多いが、近年国籍や海外居住経験は多様化している。「にほんご教室」では、来日間もない児童に3カ月間フルタイムで日本語を指導する「初期指導」と、在籍学級から週数回取り出し指導する「教科指導」を実施している。「初期指導」には日本語教室が無い近隣他校の児童も通級している。

12

自分の文化も相手の文化も大切にできる“花ノ木っ子”

西尾市立花ノ木小学校 勝田 みゆき

本校は西尾市の中心に位置し、全校児童640人に対し外国にルーツをもつ児童が80名在籍している。フィリピン、インドネシア、ブラジル、ベトナム、中国、ペルー、ネパールとルーツとなる国も様々で国際色豊かな学校である。西尾市は自動車部品関連の工場が多く、そのためか、西尾市在住の外国人は12%以上を占める。

16

成長し、進化し続ける個人と、互いの違いを活かし合える仲間づくりを目指して

浜松市立船越小学校 菊地 優子

浜松市内の小中学校の約88%に、外国につながる児童生徒が在籍している。前任校では、日本語の初期支援が必要な児童が全校の約6%在籍していた。現在の所属先は浜松駅の徒歩圏内に位置しており、比較的家庭環境に恵まれた児童が多い印象。外国につながる児童は9人在籍、そのうち4名はブラジル、中国籍の児童であり、残りは日本人の帰国子女、日本籍に帰化した児童である。

20

理解から共創へ — AIC 国際学院広島初等部における多文化共生の文化づくり

AIC 国際学院広島初等部 石田博彰

本校は開校5年目の国際バカロレアPYP認定校である。昨年度に初の卒業生を送り出し、地域と共に着実に成長を続けている。児童は日本国籍が中心でバイリンガル幼稚園出身者も多く、日英双方に親しみながら意欲的に学んでいる。運営母体には中高一貫校があり、中学校は一条校、高校はIB DP認定校として初等部の学びを継続・発展させるより良い教育環境が整っている。

初等教育段階期における「多文化共生の文化」創出に向けての具体的アクセス

熊野町立熊野第四小学校（広島県） 中村 祐哉

24

伝統的工芸品「熊野筆」の産地に位置する本校は、筆産業に従事する家庭で育つ児童も少なくない。また、隣接する政令指定都市である広島市のベッドタウンでもある。しかしながら、児童の保護者の約半数は所属校自治体出身であるという背景から、地域ごとの文化も色濃く残された地域である。外国につながる児童は、各学年1名程度である。ユネスコスクール加盟校。コミュニティ・スクール。

ONE TEAM が紡ぐ多文化共生の未来

北九州市立筒井小学校 田淵 陽平

28

昨年度、70周年記念式典を行った歴史のある学校である。また、県の無形文化民俗文化財である黒崎祇園山笠が盛んな地域であり、多くの筒井小の子どもたちが参加している。近年、校区に大きなマンションが建ち児童数が増えている。そんな中、外国にルーツがある保護者が増えており、4月よりフィリピンから日本語が話せない6年生が転入した。

アイデンティティが輝く学校づくりにむけて！～自分らしさ・その人らしさを大切に～

沖縄県宜野湾市立長田小学校 阿部 サクラ アレクサンドラ 愛美

32

本校は琉球大学に近く、外国からの研究生の子どもたちや米軍関係の子どもたちが多く在籍している。今年度に、市内で3校目となる日本語教室を「日本語国際アイデンティティ教室」という名称で開設し、アメリカやフィリピン、タイ、アフガニスタン、南アフリカ、オーストリアといった外国にルーツをもつ子どもたちが20名所属している。外国籍児童の多くは近隣の公立中学校へ進学している。

対話を大切に。違いを受け入れる心を育てる多文化共生

愛知県豊明市立豊明中学校 河村 知里

36

トヨタ系列の工場で働く人々のベッドタウンにある学校。特に本校の学区には市営団地があり、外国にルーツをもつ人が多く住んでいる。各クラス少なくとも4人ずつ外国ルーツの生徒がおり、合計約50人在籍している。出身国は、ベトナム、ブラジル、フィリピン、ペルーが多い。

社会科授業における多文化共生の文化の意識付け

名古屋市立志段味中学校 野口 哲平

40

名古屋市に長く住む、地元の生徒が多い地域である。一方で、外国にルーツをもつ保護者もおり、進路や学習面で苦勞するケースも見られる。生徒の多くは穏やかで、学校行事や生徒会活動、授業の話し合い活動に協力的である。地域の特色として、学区内に児童養護施設があること、新興住宅地のため一軒家が増え、人口が増加傾向にあることが挙げられる。在校生が900人を超えたため、今後は新設校と分離する予定である。

世代や国籍を超えて～多文化の日常に気づく

京都市立洛友中学校 川村 昌広

44

1968年京都市立郁文中学校に二部学級（夜間中学）が設置され、2007年不登校特例校の昼間部と共に学ぶ「洛友中学校」として新たに開校した。夜間部の生徒は様々な理由で義務教育を修了できなかったまたは形式卒業した学齢超過者である。21名中11名はネパール、韓国、フィリピン、中国など外国にルーツをもつ生徒たちで、で、来日時期や日本語習得状況も様々である。

「私でもない、あなたでもない、世界の誰かのために。」～多文化共生の実現にむけて～

北九州市立門司中学校 小川 亮

48

北九州市立門司中学校は、九州の玄関口北九州市門司区に位置し、264名の生徒が在籍している。校区には門司港があり、明治から昭和初期にかけて日本有数の産業・貿易拠点として発展してきた。現在「門司港レトロ」として国内外から多くの方が観光に訪れている。

convivialな学校を目指して

市立札幌藻岩高等学校 高木大作

52

各学年に、両親どちらかが外国籍である生徒（イギリス、アメリカ、オーストラリア、フィリピン、ネパール、トルコ、中国など）が、5～6名ずつおり、その数はここ数年で増加している。北海道では、ニセコ、トマム、留寿都などの地方で、観光業や農業に従事する外国人の人口に占める割合が高くなっている。札幌市でもここ数年、飲食店や製造業に従事する外国人が増えている。

自己理解⇔他者理解⇔国際理解 身近なところから創る多文化共生の第一歩

北海道札幌南陵高等学校 吉田圭佑

56

本校は北海道内でも人口が最も多い札幌市に所在しているが、学校自体は小規模であり、全校生徒数は170名程度である。その中でも保護者が外国にルーツがある生徒は少数ながら存在している。（韓国、中国、フィリピン、パキスタン）また、学校周辺の地域を見ても外国籍の労働者は以前より増えている。今後も外国にルーツがある生徒や地域住民は増えていくことが予想されている。

すべての人にとって優しい世界を探究する

埼玉県立大宮中央高等学校 塚越一江

60

活動生に限定すると、その約1割は外国にルーツをもつ生徒である。川口市に近い地域特性もあり、出身国は中国、ベトナム、クルド、フィリピンなど多岐にわたる。定時制高校の特性上、日本語学習の初期段階にある生徒も少なくない。また、国籍に限らず多様な背景をもつ生徒が在籍しており、大学のように自由な校風の学校である。

キャンパスを出て地域の現実に触れる 一多国籍タウン・新大久保を歩いてー

学習院高等科 米山 周作

64

親が外国ルーツの生徒は一定数いるが、その人数や国籍のデータは特に取っていない。都心にある私学なので、生徒は東京・神奈川・千葉・埼玉と首都圏全域から通っている。近隣には池袋、高田馬場、新大久保といった多国籍タウンがあり、キャンパス周辺のコンビニや飲食店の従業員はほぼ外国人である。

多文化共生に力点を置いたグローバルフラグシップ高専の創出

独立行政法人国立高等専門学校機構 荒川 裕紀
明石工業高等専門学校

68

本校は多文化都市・神戸に近く、外国にルーツをもつ学生が約3%、留学生は5～6%。全国から学生が集まり、約250名が寮生活をしている。寮生の1割と教員の1割が外国籍で、国際学校出身者や国費留学生も在籍。「グローバル高専」として留学経験者も多く、国際的な学びの機会が豊富である。

エンパワーメントと共生していく居場所づくりを目指して

仲尾 望 | 栃木市立栃木中央小学校

全校児童 / 生徒数 506 名

学校背景

「外国につながる児童」数は約30名で、半数が日本語指導の支援を受ける。南アジアや中南米出身児童が多いが、近年国籍や海外居住経験は多様化している。「にほんご教室」では、来日間もない児童に3カ月間フルタイムで日本語を指導する「初期指導」と、在籍学級から週数回取り出し指導する「教科指導」を実施している。「初期指導」には日本語教室が無い近隣他校の児童も通級している。

研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって
「多文化共生の文化」が必要なのか



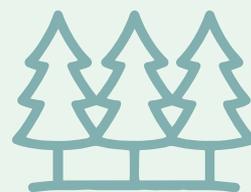
自分にとって

これまで留学や国際協力、日本語教室の現場で多様な文化と出会い、揺さぶられながら自己形成してきた。「多文化共生の文化」に育てられた身としてその価値を証明すると同時に、必要とする人のもとに届けたい。



学校にとって

学校とは、異なる他者同士が出会い、共通のめあてを合意形成し、それに向けて互いを補い合いながら自己を発揮する場である。その達成よりもむしろ過程が大切であり、ファシリテーターとして教師の働きが期待される。



世界・社会にとって

情報社会の発展により、自分の「好きな」情報に浸ることが増えた。しかし多様性を受け入れることは、社会をより豊かにさせ、前進させることにつながる。新しい価値との出会いを楽しくワクワクするものにしたい。


 現在の課題

- ①外国につながる児童は自己の多文化化を肯定的に捉えているか。母国や家族といった自分のルーツや日本の学校や社会も大切にしたいと思える支援とは。
- ②日本語が通じない児童に対する日本語教育は十分か。相手の話を聞いて理解し、自分の考えを整理して伝える対話力を育てるには。
- ③異なる背景をもつ全児童が、互いの違いを認め合い、対等な関係を築きながら、よりよい学校を目指して力を合わせることができているか。


 現在の取り組み

本校では、外国にルーツをもつ児童と保護者に対し、母語・英語・やさしい日本語を用いた資料で学校生活や社会のルールを説明し、相互理解を促している（P10 写真1）。日本語学習では、自分の故郷や家族の歴史をポスターや絵日記、プレゼン資料で紹介し、母文化への誇りと発信力を育てている（P10 写真2）。さらに昼休みに日本語教室を開放し、国籍や言語にかかわらず児童が折り紙やボードゲーム、学習を通して自由に交流できる場をつくっている。これらの実践を通して、学校全体に多文化共生の文化が根づき始めている。

● 左記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

私は、父の米国赴任への帯同、中国留学、ペルーでのJICA 海外協力隊活動を通じて様々な国で外国人として生活してきた。同じ国の人であっても家族の歴史や価値観が異なるように、私自身も日本人でありながら、様々な文化が入り混じって自己を形成していることに気付いた。多様性とは豊かさである。この豊かさを醸成するため、今私は「にほんご教室」で働いている。子どもたちも一人一人が異なる特性や経験をもっており、「日本人」「外国人」といった二分法では捉えきれない多様性がある。そこで教員に求められるのは、子どもたちが自分らしさを発揮できるエンパワーメントを支援することだと考える。その日初めて出会った子ども同士がいつの間にか仲良く遊んでいる姿を見ると、ヒトは好奇心をもって他者とつながり、そのことに喜びを感じる生き物なのだ実感する。生まれ持っている他者への好奇心—多文化共生の素地—を、守り育てる教育とは何か探究していきたい。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

近年、「共に生きる」という言葉に対する、懸念や抵抗を目にすることが多くなった。未知なるものを警戒したり避けようとしたりするのは本能によるものかもしれないが、異なる他者との出会いや協働を、楽しくワクワクする「コンヴィヴィアル (Convivial)」な営みに変えることもできる。それは相手への共感力や信頼関係の構築によって培われていくもので、その基盤は、挨拶や世間話、学びや遊びといった日常の小さな関わりの積み重ねによって育まれると考える。

学校で、地域で、そして社会全体で、私たちが取り組むべきことは、現状を維持することではなく、今日よりも明るい未来を拓くことである。そのために他者と目標を共有し、自らの使命を意識しながら互いの力を生かして支え合う学校づくりを推進し、その輪を地域へ、日本へ、世界へと広げていきたい。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

エンパワーメントとしての日本語教育

日本語教育は、単に言葉を教えることではなく、子どもが自らを理解し、思いを表現できる力を養うことだと考える。教師や家族との対話を通して、家族の歴史や今の生活を肯定的にとらえ、そこからどのように未来へ歩いていくかを考える力を、日本語学習を通して育てていきたい。

また、児童が地域の人々との関わりの中で「言葉を使ってつながる」喜びを感じ、自分たちの暮らす栃木市に親しみをもてる体験型の校外学習も取り入れたい。外国にルーツをもつ子どもも、地域に暮らす人々も、互いを知り合い、認め合いながら、「これからもここで共に生きていきたい」と感じられる地元をつくっていきたい。

家庭との連携

にほんご教室と家庭が車の両輪となり、子どもの成長を支える仕組みを築いていきたい。現在入級面談では、児童と保護者がにほんご教室の目標を話し合いながら設定し、三者で学習計画を共有している（写真3）。定期的な指導評価に加え、今後は家庭にも児童の日本語習熟度を伝え、成長を共に確認できるようにしたい。

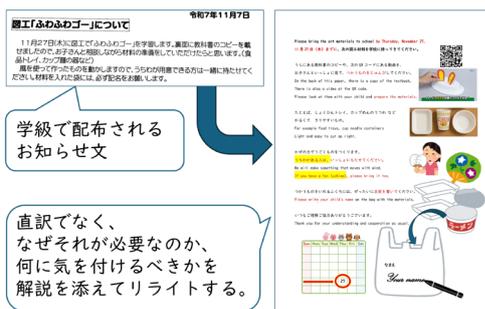
また、親子で学び合う機会を設け、家庭と学校が一体となって学びを楽しめるようにしたい。保護者へのにほんご教室への協力依頼では、これまでは母語のあいさつやふるさとの写真集めなど、文化紹介への協力が中心だったが（写真4）、今後は児童のアイデンティティ形成につながる探究的な学びの支援や、地域理解学習への参加を促していきたい。学校と家庭が連携し、互いの文化を尊重しながら、子どもの成長を共に喜び合える「協働の学び」を進めていきたい。

共生していく居場所づくり

今年度よりにほんご教室を休み時間に開放しており、外国にルーツをもつ児童だけでなく、誰でも自由に訪れることができる空間となっている。教室内では遊びと学びが交錯し、互いの違いを尊重しながら協働できる雰囲気が少しずつ育ちつつある（写真5）。児童が作成した母文化に関するポスターなども展示し、文化交流の中心としたい。

異学年・異文化の児童が交流する姿も見られるようになってきた（写真6）が、こうした活動を児童主体で継続できるよう支援し、にほんご教室を「みんなの居場所」として機能させたい。

● 現在の取り組み



（写真1）学級で配布するお知らせを多言語とイラストでリライト



（写真2）母文化について調べた成果物は、にほんご教室入口にも掲示

● 家庭との連携取り組み



(写真3) 家族で話し合い作成した「めあてのダイヤモンドチャート」



(写真4) 保護者と協働作成し、在籍教室に掲示中の故郷の紹介ポスター

● 共生していく居場所づくり



(写真5) 休み時間に集まり、思い思いに学んだり遊んだりしている



(写真6) 別々に遊んでいたのに、いつの間にか打ち解けていることも

外部機関との連携

栃木県青年海外協力隊 OB 会	副会長として国際交流イベントを多数企画。異文化理解を深める行事を学校と連携して実施し、児童の国際感覚を育てたい。
栃木県国際交流協会	前職での勤務経験を生かして地域の多文化化に関する情報交換を行い、日本語教育や教室づくりの実践に活かせるヒントを得たい。
栃木市国際交流協会	ハラル弁当の手配など学校だけでは対応しきれない支援を依頼。今後も多面的に外国人家族を支える協働体制を強化していきたい。
自主夜間中学等の地域市民団体	多文化共生の実践者と情報共有を行うことで、学校外の視点を教育活動に生かし、にほんご教室で得た知見も地域教育へ還元したい。
市内の文化施設	学区内の地域文化施設と連携し、児童が日本語を使って地域の伝統や芸術に触れ、その魅力を発信する活動を行いたい。

自分の文化も 相手の文化も大切にできる“花ノ木っ子”

勝田 みゆき | 西尾市立花ノ木小学校

全校児童 / 生徒数 640名

学校背景

本校は西尾市の中心に位置し、全校児童 640 人に対し外国にルーツをもつ児童が 80 名在籍している。フィリピン、インドネシア、ブラジル、ベトナム、中国、ペルー、ネパールとルーツとなる国も様々で国際色豊かな学校である。西尾市は自動車部品関連の工場が多く、そのためか、西尾市在住の外国人は 12%以上を占める。

研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

自分自身が、常に文化の違いと向き合い、どう共に生きるかを考えながら世界を広げていきたい。共通点や相違点を受け入れ、外国人児童に寄り添い、彼らにとって架け橋のような存在になりたいと考えるから。



学校にとって

将来、あらゆる場面で自分とは異なる文化的背景をもつ人々と出会うであろう子どもたち。学校という一つの社会の中で、様々な文化の違いを知り、多文化共生の感覚が当たり前の児童を育成すべきだから。



世界・社会にとって

「日本人ファースト」という言葉が、とても悲しく響く昨今、世界の国々が自国以外の国々のことも考えて行動できる社会となり、互いを思いやることで相互理解、多文化共生につながると考えるから。



現在の課題

日本語担当教員として、DLA 診断、日本語初期指導、教科の補習、通訳や懇談会の調整などを担当している。外国人児童に日本語を一早く身につけさせ、学級で活躍できるように支援することに加え、彼らのアイデンティティの確立を支援していきたいと考えている。そのために、児童一人一人を大切に、寄り添っていきたいと考えている。また、学校の中では、まだまだ「多文化共生」に対する意識は低く、国際理解教育の視点で授業を展開しようとする教師は少ない。外国人児童の現状を、多くの先生方に理解してもらうことが重要だと考える。

*DLA：文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のための対話型アセスメント



現在の取り組み

児童への日本語指導・教科指導に加え、在籍する外国人児童をルーツの国ごとに集め、月に1回母語教室を開催している。語学支援員と共に、児童の思考を支援、アイデンティティの探求への一助となるように指導を工夫している。例えば、自分のことを母語と日本語で紹介したり、ルーツの国について調べたり、日本との違いを話し合ったりしている。毎回、母文化を大切にしたいという児童たちの想いを強く感じる。母語教室のまとめの活動として、「世界のクイズ大会」の開催を目標としている。

● 左記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

初対面のメンバーとの対話はとても緊張感があり、会話についていけるだろうかと不安もあった。しかし、何度も対話し、相手の考えが見えてくると、自分との相違点に驚いたり、共通点を見つけて安心する自分がいた。異なる校種に勤務していても同じような悩みを抱えていたり、同じ校種に勤務していても、自分にはない新たな視点で物事を捉えていたり、常にメンバーとの対話は学びや気づきの多い有意義な時間であった。また、地球ひろばの見学やワークショップ、フィールドワーク等を通して、異なる文化においては、同じものを見たり聞いたりしても、捉え方が異なるという経験を実際に体験することができた。対話や様々な体験を通して思考を巡らせ、自問自答する中で、「多文化共生の文化」について考えを深めることができた。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

- ・自分の文化と同じように、相手の文化も大切にできる文化
- ・互いの文化の違いを知り、肯定的に捉えようとする文化
- ・各国の衣食住の文化の違いを知り、その良さを共感し、尊重する文化

人は誰しも自文化の中で育ち、それを大切にしている。ある文化に触れ、自文化と比較しながら見ると不思議に感じることも、その文化に親しんでみればその重要性や意味を理解することができる。人と人との間には様々な文化があり、そこには違いがあって当たり前とも言える。その違いに気づき、新たな視点を獲得したと肯定的に捉えられる文化を目指していきたい。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

児童に対して

① 普段からできる持続可能な多文化共生の活動

廊下や教室の掲示を利用し、世界の食べ物を日頃から紹介している。令和7年度は愛知県のフレンドシップ事業の一環として、「アジアをAsiaう学校給食の日」と称し、アジア各国の食べ物が実際に給食で紹介される。その第1弾として、タイ料理が給食の献立として登場した。

給食の時間に流れるお昼の放送で、世界各国の歌を紹介していきたい。また、長放課の全校遊びの時間を利用し、ベトナムの「ダーカオ」やフィリピンの「パティンテイロ」などを紹介し、世界の遊びを全校で楽しんでいきたい。



フレンドシップ事業 アジアを“Asiaう”学校給食の日
給食の献立として登場したタイ料理と配付されたプリント



② 母語・継承語を大切に

母語の力の方が高い児童を中心に、各言語の語学支援員（カラフルより派遣）に教室での各教科の授業への入り込みによる母語支援を依頼している。また、児童の母語・継承語を大切にしたいと考え、語学支援員と共に母語教室を開催している。継続的に実施していくために年度当初に実施日を決めており、現在は月1回実施している。



インドネシア語の母語教室で調べたことを発表する児童

③母語教室での成果発表

昨年度は母語教室で調べてきたことを全校児童の前で発表した。そしてその振り返りに、次はクイズを作って出題したいとの声があった。今年度は、母語教室で調べたことを発表する場として、全校児童への各国のクイズ大会の開催を予定している。クイズを通して、様々な国の文化を多くの児童に知ってほしい、そして、自分の国のクイズを出題する児童には自分の文化に誇りをもってほしいと願っている。また、各国の伝統服を着て登校できる「伝統服 Day」を開催し、それぞれの良さを伝え認め合うことができたかと考えている。

保護者に対して

- ①すべての配付物に「やさしい日本語」を
- ②伝わらないをゼロに（語学支援員による電話連絡をスムーズに依頼）
- ③通訳付き懇談会を通して関係を強化（1人30分の貴重な情報交換の時間）
- ④保護者が先生（料理教室）

先生方に対して

- ①日々の会話から先生方の困り感を共有
- ②校内研修の実施
- ③語学支援員と担任とのパイプ役となり関係を強化
- ④保護者を先生とした料理教室での異文化体験

学校に対して

- ①カリキュラム作成の提案
- ②日本語指導部会立ち上げの提案



日本語ルームの教室掲示「世界の美味しい料理」
（世界各国の料理を紹介）

外部機関との連携

JICA 中部（なごや地球ひろば）	校外学習での訪問や出前授業の活用。
愛知教育大学 外国人児童支援リソースルーム	日本語指導教材の利用。
多文化ルーム KIBOU（社会福祉法人・西尾市）	年長児を対象にしたプレスクール
初期指導教室カラフル（西尾市教育委員会）	語学支援員を派遣
西尾市国際交流協会	にほんごひろば（ボランティアによる日本語教室）

成長し、進化し続ける個人と、互いの違いを活かし合える仲間づくりを目指して

菊地 優子 | 浜松市立船越小学校

全校児童 / 生徒数 314名

学校背景

浜松市内の小中学校の約 88% に、外国につながる児童生徒が在籍している。前任校では、日本語の初期支援が必要な児童が全校の約 6% 在籍していた。現在の所属先は浜松駅の徒歩圏内に位置しており、比較的家庭環境に恵まれた児童が多い印象。外国につながる児童は 9 名在籍、そのうち 4 名はブラジル、中国籍の児童であり、残りは日本人の帰国子女、日本籍に帰化した児童である。

研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

異文化をもつ者同士が心地よく共存するためには、互いの価値観を許容し合うことではないか。生活のあらゆる面で多文化共生が当然となっていく中でどう生きるのか、より深く考える機会としたい。



学校にとって

外国につながる児童に限らず、異質な特性への悪口やいじめが時に見られ、「受容力」を育成する必要性を感じる。母語の異なる児童には日本語習得のためのサポート、言葉の壁を乗り越える試みを考えたい。



世界・社会にとって

自国ファーストで排他的な考え方が世界中に横行し、SNS では匿名の誹謗中傷が普通になっていることに恐怖を感じるため。将来、児童が世界を見回した時、多文化に興味をもち、互いの違いを面白く感じる心豊かな大人に育ててほしい。


 現在の課題

日本語の初期支援が必要な児童に対して、週1時間の補習は不十分と考える。私の経験では、5年生から卒業まで2年間補習を受けた児童の日本語能力は、大きな変化は見られなかった。また、保護者の考え方や生活様式は教師にとっても重要な要素である。児童同士の単純なトラブルの際、相手方の出身国を強調した呼び方をするなどの差別的な意識により、問題がより複雑になっていくことがあった。児童が学校で居心地よく過ごせるよう、様々な文化があるのは当然で、とても興味深いものだという事を伝えたい。それによって彼らの心の扉が開かれると期待する。


 現在の取り組み

個人によって多様な文化的背景があるため、単に互いの違いを認めるだけでなく、積極的に活かす実践をしていきたい。しかしその共生は難しくなっていると感じる。例えば、他者との距離感の違い・受け取る感覚の違いにより、いざこざが起これり、いじめに発展する可能性すらある。道徳、総合的な学習の時間等で、「人権とは」「思いやる心とは」等を考える機会を設けている。

縦割り活動や学校行事で、高学年は全員、低・中学年の児童のリーダー役となる。自分の考えを押し付ければ反発が返ってくることに気づき、成長する機会となっている。

● 左記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

本研修では、自分の本音と向き合うことの大切さを実感することができた。児童に対し、何を伝えたいのか、伝えるべきか、何を伝えられるのか、何を願ってこの仕事をしているのか、改めて考え、書き出していった。突き詰めると、自分はどのように生きたいのか、優先したいことは何か、について向き合うことができたと思う。

小学生というまっさらな時期に、「多文化共生は楽しいこと」と気づいてほしい。世界は広く、様々な人々が精一杯生きているという事実を、授業の中で伝えていきたい。また、自分自身の経験から、体験に勝るものはないと考えているので、これまで以上に児童に体験的学習を試みたいと思う。

本研修では、幾多の経験をもつ諸先輩の体験談を直接お聞きする機会に恵まれた。体感することが人間に与える影響や、体験したことが人間同士の深い洞察や思いやりにつながっていることを学ぶことができた。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

「成長し、進化し続ける個人」と、「互いの違いを活かし合える仲間づくり」

個々人が成長していくことが、前提にある。しかし、環境によって、成長を阻害される場合もあり得る。環境に負けない人間になることは大変困難であり、特に児童は、家庭環境の影響が大きい。そこで、学校という枠組みの中で、どのような家庭環境にあっても、一人の人として尊重されることは当然であることを学ぶ必要がある。国の違いは大きいですが、同時に児童の個性や価値観の違いも大きい。いかなる背景で育つにしろ、個人が尊重される意識が多文化共生の基盤となると考える。教室での学習や季節の行事を通して、その違いや面白さ、歴史的背景などを知り、見たことのないものや知らないことを排除するのではなく、互いの違いを活かし喜び合うという認識を根付かせていきたい。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

1 音楽を通じた実践

● これまでの実践から

音楽を通じて、できるだけ多くの体験を児童に提供したいと計画し取り組んでいる。前任校では、沖縄県の音楽に取り組んだ。以前流行した「海の声」は、沖縄の楽器三線を弾きながら歌う俳優の姿が、児童たちには魅力的に映ったらしい。普段の授業では集中力に欠ける児童が、三線の練習中から授業態度に変化が見られ、他の先生方からも「ずいぶん変わった」と言われるほどであった。児童たちはちょっとした機会に出合うことで成長する可能性を実感したエピソードである。



三線を全校児童の前で披露する生徒



三線の音色に誘われて自然と集まってくる仲間たち

所属校で毎年恒例の校内音楽会は、計画段階から本番まで、普段の授業ではできない体験学習をする。児童が好きな曲、やってみたい曲をもち寄り、その中から合奏や合唱をしたい曲を決めていく。自分たちの選んだ曲を練習し、発表できるところまで続けていくのは、教師にとっては骨の折れる作業であるが、児童の自発的アイデアを生かしながら、個人練習を黙々と続けて上達を喜ぶ姿を見るのは大きな手ごたえがある。

本年度は、前年度の6年生が発表した曲と同じものをやりたいとの希望があった。前年度の6年生は、国・年代・形式の異なる10曲をメドレーで演奏した。5年生だった彼らの耳に強い印象を残していたことが分かった。音楽は、多文化を知り体験するには最適な教材である。本年度も、曲を変えて挑戦することとなった。11月現在、積極的に練習に取り組んでいる姿が見られる。本番が終わった時、児童たちは苦労して得た後に味わう達成感と共に、多文化を知る素晴らしさを身体全体で味わうのではないかと期待している。

● 日常的な取り組み

音楽の授業の導入として、外国語の歌や童謡を紹介して未知の国への興味を誘う。外国語に限らず、日本各地出身の祖父母・両親をもつ児童が知っている歌、言葉の言い回しなど紹介する。

● 校内放送の活用

登校時・給食の開始と終わり・清掃の開始と終わりには、校内一斉に BGM が流れる。「日常にあふれる多文化共生」を目指し、国・年代・演奏形態等の違いを楽しめる選曲をする。

2 国際理解教育

● 外国とつながりをもつ児童の保護者にインタビュー

- ・言葉や習慣の違いで、困ったこと
- ・自国の童謡や昔話等の紹介
- ・双方の国の似ているところや違うところ
→育児の仕方の違い
- ・多文化共生の文化を創るために必要な力 等

● 児童が興味をもった外国を知る

各国の小学生の遊び、童話、食べ物や民族衣装等を調べ、発表する。

外部機関との連携	
JICA	国際協力出前講座を活用し、JICA 海外協力隊経験者に、多文化理解の経験や国際平和協力についてインタビューする。キャリア教育にもつなげる。
所属校 PTA 役員の保護者	外国につながる児童の保護者に、生活習慣や子ども時代の学校の様子などをインタビューし、多文化を知る機会をもつ。
特定非営利活動法人 (NPO 法人) 浜松生涯学習音楽協議会「浜松ジュニアプラス」	2023 年 7 月、台湾の小学生と合同練習。今後も他団体との交流を継続し、次世代の多文化共生文化の担い手育成を目指す。



台湾の小学生との交流①

日本語、英語、中国語で書いた手作り名刺を交換



台湾の小学生との交流②

同じ色のユニフォーム (偶然!) で聴き合う浜松の小学生

理解から共創へ — AIC 国際学院広島初等部における多文化共生の文化づくり

石田 博彰 | AIC 国際学院広島初等部

全校児童 / 生徒数 95 名

学校背景

本校は開校 5 年目の国際バカロレア PYP 認定校である。昨年度に初の卒業生を送り出し、地域と共に着実に成長を続けている。児童は日本国籍が中心でバイリンガル幼稚園出身者も多く、日英双方に親しみながら意欲的に学んでいる。運営母体には中高一貫校があり、中学校は一条校、高校は IB DP 認定校として初等部の学びを継続・発展させるより良い教育環境が整っている。



※ PYP : Primary Years Programme (初等教育プログラム)
 ※ IB : International Baccalaureate (国際バカロレア)
 ※ DP : Diploma Programme (高等教育プログラム)

研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



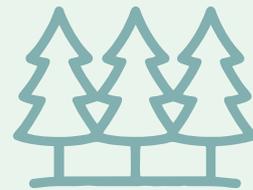
自分にとって

子どもが「多文化共生の文化」の原点で基本である。当たり前としないこと。自らの経験、立場、価値観を問い直し「一人一人の違いを尊重し共に学びを創り上げる」ことが必要である。原点回帰&リセットするため。



学校にとって

「改善」が必要である。学校は「同調」文化が根強い。制度改革に先立ち、まずは大人が安心して意見を交わし、互いの文化的背景を共有できる「対話の場」を整備することが真の改善への第一歩であると考えため。



世界・社会にとって

「Connect (つながり)」が必要である。分断や排他が強まる現代に於いて、国や文化を越え、経験と価値を意識的に共有することで持続可能な共生社会の基盤となり、未来平和と共存の礎となることに違いない。


 現在の課題

在籍児童は日本国籍が中心で海外ルーツは少数派であり、多文化共生を掲げても日常で文化差による摩擦や相互理解の機会は限られる。バイリンガル教育と多文化共生は混同されがちで文化的背景に焦点が当たり難い。多文化共生を柱に据えたい一方で教員の専門性や経験に差があり、授業や学級経営への落とし込みには迷いもある。保護者は英語教育や進学を重視し、多文化共生への関心は必ずしも高くはない中、自分自身も多文化をどう捉え、学校内で推進し、子どもに示すか模索している。


 現在の取り組み

本校カリキュラムの探究学習で、多文化的視点を扱うテーマを設けている。言語だけでなく異文化理解を意識した活動（例：世界の生活文化紹介、国際行事の学習）を実施している。教職員間では、授業事例や成功体験を共有、実践力と一貫性を高めている。家庭や地域と連動し、国際交流イベントや文化行事を創出させている。教室や校内掲示、日常行事を通じ「多文化共生」が目に見える形になる工夫をしている。児童が多文化共生の実践者になれるようプロジェクト型学習の発表機会を作りリーダーシップ活動を促進している。

● 左記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

今回の研修を通じて、「多文化共生の文化」は特別な概念ではなく、教育や社会の根幹に関わる姿勢であることを再認識した。私自身、子どもたちがもつ多様な背景に向き合う中で、無意識の前提や価値観に気づかされる場面が多くあった。多文化共生とは、違いを受け入れるだけでなく、互いの差異を学びや創造の起点として生かすプロセスである。そのためには、学校の大人がまず安心して考えを共有できる対話環境を整え、同調圧力の中で埋もれがちな声を丁寧に拾い上げる姿勢が欠かせない。また、社会に視野を広げれば、分断が進む現代において他者と「つながる」力がますます重要になる。異文化間の交流が生む理解と共感、持続可能な共生社会に向けた小さくも確かな一歩である。今回の学びは、自分自身の原点を見直し、教育現場・学校組織・社会の三層で文化を育む必要性をあらためて意識させてくれた。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

AIC 国際学院広島初等部では、児童は日本人である一方、教職員は多国籍で構成されている。この特性は、多文化共生を日常的に実践できる大きな強みであると感じている。文化の違いを指導上の課題ではなく、新たな価値を生む対話のきっかけとして捉えることが重要であり、教員が母語や文化を生かして授業を行う場面では、児童が多様性に自然に触れ、他者への尊敬や好奇心を育む姿が見られる。

私は、理解にとどまらず「共創」へと発展する多文化共生の文化をつくりたい。教員・児童・保護者が互いに学び合う主体となり、多様性そのものを教育の質を高める力へと転換する文化的基盤を築くことを目指している。そのために「対話」「信頼」「共創」を軸に、協働と児童主体の学びを重ね、学校の日常に多文化共生を根づかせていきたい。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

私は「多文化共生の文化」とは、制度や行事の有無によって生まれるものではなく、日常の関わりや対話の中で形づくられていくものであると考える。AIC 国際学院広島初等部では、在籍する児童が日本人である一方で、教職員は多国籍で構成されており、教育観や文化的背景の多様性が学校文化の土台にある。この環境を活かすことこそが、本校における多文化共生の文化を創出する鍵であると感じた。以下に、そのための三つの取り組みを挙げる。

第一に、教職員間の文化的対話の深化である。異なる文化的背景をもつ教職員が協働する本校においては、言語や教育観の違いを理解し合うことが、児童にとってのモデルとなる。そこで、定期的に「ダイバーシティ対話セッション」を設け、授業観や学級経営、子ども理解に関する文化的視点を共有する場を設けたい。この対話を通じて、教員同士が“共に学び、共に育つチーム”としての信頼関係を深めることが、多文化共生の第一歩である。



校舎前にて AIC Word College (AICWC) 広島教職員スタッフ一同

第二に、児童の視点からの多文化理解の促進である。日本人児童という構成上、異文化を「外のもの」として学ぶ傾向が生じやすい。これを克服するために、教職員の多様性を活かした「身近な文化の学び」を展開する。例えば、各教員の出身国・地域の文化や価値観をテーマとした“Teacher’s Culture Talk”や、複数言語での朝の挨拶・感謝表現の共有などを通して、児童が日常の中で自然に多文化的感性を養う機会を増やしたい。子どもたちが「違いを面白がり、尊重し合う」態度を育むことがねらいである。

第三に、地域・保護者との協働による多文化の拡張である。学校内の取り組みを地域に開き、広島という国際平和都市の特性を踏まえた共生の実践へとつなげる。地域在住の外国人、大学の留学生、国際 NGO などと連携し、「多文化共生×平和教育」をテーマにしたワークショップや授業を企画したい。また、保護者との協働を通じて「家庭でも子どもが文化的多様性を語れる環境」を整えることも重視する。そのために、多言語カフェや多文化オープンダイアログの場を設け、学校と家庭、地域が一体となって共生文化を育てていく。

これらの取り組みを通じて、本校における多文化共生の文化を「学ぶ対象」から「生きる文化」へと転換し、日常の営みそのものに根づかせたい。研修で得た学びを基盤として、学校という小さな社会から、より広い世界とつながる「Connect」の実践を継続していく所存である。



AICWC 広島初等部の日常風景



探究学習で近隣散策に出たときの子どもたち



探究学習の近隣散策で川の様子を観察する子どもたち



教室に戻り探究学習のまとめ課題に取り組む子どもたち

外部機関との連携

広島大学や広島市立大学	大学生や留学生を授業支援や探究活動に招き、本校児童と直接関わる機会を設け、教職員の国際性と児童の学びを結びつける。
JICA 中国	国際理解教育プログラムを活用し、本校児童に「世界とつながる学び」を提供する。教職員に多文化共生教育の最新事例を共有する。
広島市および広島市国際交流協会	外国籍教員が地域の国際理解イベントに参加する機会を設け、学校と地域が互いの文化資源を共有できる関係を築く。

初等教育段階期における「多文化共生の文化」創出に向けての具体的アクセス

中村 祐哉 | 熊野町立熊野第四小学校

全校児童 / 生徒数 263 名

学校背景

伝統的工芸品「熊野筆」の産地に位置する本校は、筆産業に従事する家庭で育つ児童も少ない。また、隣接する政令指定都市である広島市のベッドタウンでもある。しかしながら、児童の保護者の約半数は所属校自治体出身であるという背景から、地域ごとの文化も色濃く残された地域である。外国につながる児童は、各学年1名程度である。ユネスコスクール加盟校。コミュニティ・スクール。

研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



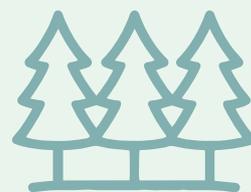
自分にとって

「地球市民教育」(グローバル・シティズンシップ教育 / GCED) を基軸とした社会科をはじめとする教科教育を行っていく上で、これまで「多文化共生 (の文化)」へのアクセスが希薄であったと認識しているため。



学校にとって

外国人児童生徒等への学校教育の現状、成果と課題の把握とそれに対する理解、さらには改善へとつなげることができるため。また、「令和の日本型学校教育」の構築に寄与することができるため。



世界・社会にとって

国際的な人的協力関係の強化につなげていくことができるため。また、多元的で多様な文化的側面と向き合い寄り添っていくことで、クリエイティブな発想の創出・活動を期待することができるため。


 現在の課題

所属校自治体の示す『第6次 熊野町総合計画』（2021）施策の大綱・基本目標2には「学ばふ力と豊かな心を育むまち」が示されている。その中の基本施策7において「地域間交流・多文化共生・国際理解の推進」の3点が明記されている。これに沿って、自治体の学校教育に目を向けていくと、「地域間交流」と「国際理解の推進」については、その具体が明示でき、継続された顕著な取り組みが見られるものの、一方で前述の2点と比較すると「多文化共生」においては、その取り組みや推進については課題であるとも捉えられる。


 現在の取り組み

所属校では、校内研究に係り文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』（2018）に示される4つの視点のうち、多文化共生に関わりの深い「C主として集団や社会との関わりに関すること（17）伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」についての授業づくりが骨太に行われている。現在、これらを「（18）国際理解、国際親善」と関連付ける学びに向けた取り組みを進めているところである。

● 左記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

左記の考えに至った理由は、自分自身の実践する開発单元や授業実践等において「多文化共生（の文化）」共創へのアクセスが不足しているという自己課題認識を起点に、学校教育・教科（等）教育が果たしていく役割について、多角的な視点から考えを深めていきたかったからである。これまでの私の授業実践においては、GCED（地球市民教育）の考え方を基盤としながらも「多文化共生の重要性」については具体的な授業実践には至っていない現状があった。

そこで、具体的な開発授業を実践・検証することによって、それはやがて「学校」・「世界・社会」の「多文化共生の文化」創出にも部分的・限定的ではあるが、連関していくのではないかと考えた次第である。本研修における学びや気づきを生かし、開発的なアプローチから授業構築・授業実践を行い、児童のリフレクション分析から開発授業実践の効果検証等を継続的に実施していきたい。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

私が創りたい「多文化共生の文化」は、以下の2点に要約することができる。

1. 多文化間の「緩やかなつながり」をシンパシー・エンパシーのもとで生み出すことのできる機会の創造。
2. 1. に示す「緩やかなつながり」を愉しむことのできる機会の創造。

2点の共通するキーワードは、「緩やかなつながり」である。「緩やかなつながり」は多文化共生の文化創出におけるスタート地点であり、そのつながりをもち続けることは、地域での持続的な文化理解へも紐づくものである。「緩やかなつながり」とは、決して一時的ではなく、また頻発的でもない。そこで得られるものは、非日常的であるとも言える。それらの文化とのつながりを愉しむことのできる機会を緩やかにもつことによって、それはやがて地域社会における創造性という土壌を育むことにつながると考える。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

「多文化共生の文化」を創るための取り組みとして、小学校第5学年・第6学年「特別の教科 道徳」における授業開発・実践とその効果検証を行うことが考えられる。授業の学習展開（簡易略案版）は、以下に示す通りである。

主題・内容項目

『みんなの「多文化共生フェス」だから……』・【C（19）国際理解、国際親善】

ねらいと教材

【ねらい】折り合いがつきにくい「文化的対立」と向き合う中で、それを解決に導こうとする思考・具体的行動提案から、建設的・合理的に意思決定しようとする道徳的判断力を育む。

【教材名】『みんなの「多文化共生フェス」だから……』（筆者自作教材）

〈授業展開具体案〉

● 授業導入

1. 本時の主題に係る問題意識をもつ。

「市で行われた「多文化共生フェス」で発生した異文化間の一方向的リジェクト*を、問題（個人的アイデンティティにおける対立に関する問題を想定）として取り上げる。（資料1）

※文化的な戒律によって、一方向的に受け入れることができない立場があること。

本時の問い：

みんながこの「多文化共生フェス」の主催者だったら、この問題のどのように対応しますか？（資料2）



（資料1）「多文化共生フェス」で発生した異文化間の一方向的リジェクト
異文化間ブースで発生した一方的なリジェクトに係る関係図。



（資料2）「多文化共生フェス」参加団体における3つの立場
2つの個人的アイデンティティから発生した3つの立場に係る関係図。

● 授業展開①

2. 児童それぞれが自らの考えを表出し、お互いの対応について意見の共有を行う。

児童個々の考えを尊重しながら、意見の共有を通じて主題である「多文化共生」の視点に目を向けるよう誘う。

● 授業展開②

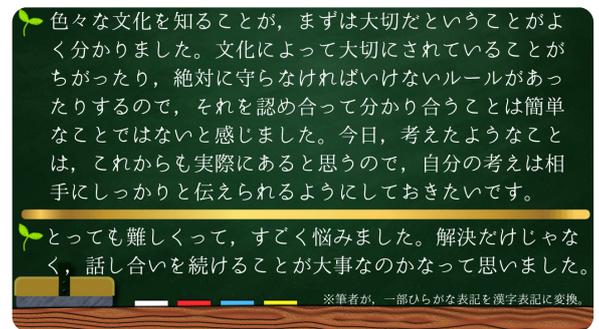
3. 実際の「多文化共生フェス」主催者の対応について知る。

1市の担当者の実際の対応を一例として取り上げる。(正解の対応として、取り上げないよう配慮する)

● 授業終末

4. 「受容困難な状況」が起こりうる「多文化共生」について、自分自身がどのように向き合い、また寄り添っていくのかについて、本時での学びをもとにリフレクションをまとめる。(資料3)

「多文化共生」を基軸とした道徳的価値判断を通じて、たとえ混沌や葛藤があったとしても、そこに向き合い続けていくことのできる大切さに気づき、多文化(異文化を含む)を受容・包摂することができる心情を育む。



(資料3)本時における学びのリフレクション記述の一例

【主要参考文献】

- ・金子邦秀 [監] (2020) 『多様化時代の社会科授業デザイン』晃洋書房
- ・熊野町総務部政策企画課 (2021) 『第6次 熊野町総合計画 2021>>>> 2030』
- ・貴戸理恵 (2021) 『個人的なことは社会的なこと』青土社
- ・坂井俊樹 (2022) 『〈社会的排除〉に向き合う授業』新泉社
- ・明治学院大学教養教育センター社会学部 [編] (2016) 『もうひとつのグローバル化』かんよう出版
- ・文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 社会編』
- ・文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 特別の教科 道徳編』
- ・吉川友香 (2025) 第17回 中国ブロック 海外子女教育国際理解教育研究大会・第31回 岡山県国際理解教育研究大会『多文化共生社会に向けて～気づこう、マイクロアグレッション～』(公益財団法人 大阪府国際交流財団 企画推進課) 講演資料
- ・Joel Gordon Best [著] / 赤川学 監訳 (2020) 『社会問題とは何か』筑摩書房
- ・Michael Walzer [著] / 石田淳ほか4名 [訳] (2001) 『グローバルな市民社会に向かって』日本経済評論社

外部機関との連携

JICA 中国	主として「多文化共生の文化」創出に関して、授業実践教材に係る相談・連携を図ることができる。
広島国際理解教育研究協議会	主として「多文化共生の文化」創出に関して、授業実践内容・教材に係る指導、相談・連携を図ることができる。

ONE TEAM が紡ぐ多文化共生の未来

田渕 陽平 | 北九州市立筒井小学校

全校児童 / 生徒数 283 名

学校背景

昨年度、70周年記念式典を行った歴史のある学校である。また、県の無形文化民俗文化財である黒崎祇園山笠が盛んな地域であり、多くの筒井小の子どもたちが参加している。近年、校区に大きなマンションが建ち児童数が増えている。そんな中、外国にルーツがある保護者が増えており、4月よりフィリピンから日本語が話せない6年生が転入した。

研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって
「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

変化の激しい社会の中で、違いを排除するのではなく、認め合い、より良い社会の担い手になるため自分を変容し続けていくため。

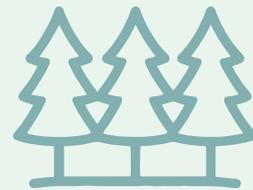
子ども達の自尊心を育てていくことにつながるから。



学校にとって

特別支援や外国籍の児童が増えている現状で、不安に思っている子どもたちが、自信をもって幸せに生きていけるようにするため。

学校で育った児童が、地域で活躍できるようにするため。



世界・社会にとって

自分も大切にし、みんなも大切にできるような世界規模で考えることのできるグローバル人材の育成につながり、だれもが暮らしやすい社会を形成できるようになるから


 現在の課題

これまでも外国にルーツがある保護者がおり、学校とのコミュニケーションが難しい現状もあったが、児童が日本語を話せているので問題にはならなかった。しかし、4月に転入してきた児童、保護者共に日本語が読めない、話せない状態である。そんな児童に対して、学校も担任もどう対応したら良いか前例がなく、四苦八苦している。学校の掲示や通信、教科書もすべて日本語なので、保護者も児童も困難を抱えている。


 現在の取り組み

JICA 研修員の交流プログラムや総合的な学習の時間において、海外の人と英語で会話したりゲームをしながら交流したり、ワークショップを通して国際理解教育に取り組んでいる。転入してきた児童に対しては、週に一度の日本語教師による日本語指導、担任は翻訳機(ポケットク)を介してコミュニケーションをとっている。また、校内でのケース会議を行ったり、日本語指導員に話を聞いたりしながら学校全体でどう対応するか情報を共有している。

● 左記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

教育現場では、学級の中でも能力や国籍、男女などの違いがあり多文化が共存している。一昔は、一斉授業でみんなが同じようにすることが正しいとされていたが、同じようにできない人がいることが分かり、最近はユニバーサルデザインの普及や個別最適な学びが拡充している。研修を通して、違いはあるが、その違いに寄り添っていくことが大切だと感じた。自文化中心主義でもだめで、文化相対主義でもだめ。どちらか一方ではなく、当事者たちが寄り添いながら新しく創造していくことが多文化共生の文化を共創することだと思った。違いによって苦しんでいる人、困っている人の心の痛みが少しでも和らぐようにできるのが教育であり、その人たちに寄り添い行動できるのが現場にいる教員だと思った。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

- 違いを区別するのではなく、それを受け入れ、みんなが自信をもって幸せに生きていけるように寄り添い対話を続け、そこにいる人たちが安心して笑顔で過ごせるようにルールや価値観をアップデートし続けていくもの。また、その国の文化を土台としながら、他の文化も尊重し、新しいものを創り出していけること。
- 将来は、誰かに寄り添うことが特別な優しさではなく、当たり前の日常の振る舞いとして息づく社会。
- 一人も悲しむことなく、自分に自信をもっていろいろなことに挑戦でき、安心と笑顔が広がっていく社会



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

多文化共生の視点≒個別最適な学びの視点をもった授業づくり。

読む、聞く、話す、書く、動くなど複数の学び方を許容したり、ICTを使って自分のペースで学習を進めたり、個人・ペア・グループの学ぶ形態を自由に選択できるようにしたりする。また、違う意見に出会う＝学びが深まる構造に授業を設計する。さらに、先生に尋ねる（支援を受ける）＝恥ずかしいをなくす学級文化をつくる。

UD（ユニバーサルデザイン）の学校を目指した各教室の看板づくり（ピクトグラム）

日本語を読んだり、使って話したりすることが難しい児童がいるので、学校の教室の看板などをピクトグラムで表示するようにする。その児童がいる学年も含めて学校全体で取り組むことで、楽しみながら多文化共生の文化を育んでいきたい。



学校の図書室の看板に掲示するために描いたピクトグラム



ワークショップ

国際理解教育や多文化共生のワークショップを通して、外国の文化を知ったり、遊びを通じた異文化体験をしたりする。知ることによって外国について興味関心をもつことができ、ジブンゴト化できるようにする。

JICA 研修員交流プログラム

来日した研修員と英語を使って交流し、英語で気持ちが通じることが楽しいと感じたり、話したり一緒にゲームをすることで親近感を感じたりできるように異文化理解につとめる。



総合的な学習の時間や児童会活動（縦割り活動）による文化紹介

学校に在籍する様々な国籍にルーツをもつ児童の文化紹介を計画する。その国の衣装や歌や食事をタブレット（ICT）で紹介する。日本の文化も同時に紹介し、郷土愛を育むことをねらいとする。

日本語指導員との連携

日本語指導員の先生と、外国籍の児童について得意な学び方や単位でつまずきそうな場面、サポートが必要なタイミングを事前に相談し情報共有をする。

以上のような取り組みが一過性で終わらないように、教育課程（カリキュラム）に組み込み、教育活動として位置付けるようにする。

外部機関との連携

JICA 九州	JICA 研修員との交流やセンター訪問や出前講座による多文化共生のワークショップを依頼する。
北九州市国際交流協会	ゲストティーチャーによる海外の文化紹介
日本語指導員	日本語指導員に、外国籍の児童の困り感や学校や各学級でできることなどを相談するなど情報共有を行う。

アイデンティティが輝く学校づくりにむけて！ ～自分らしさ・その人らしさを大切に～

阿部 サクラ アレクサンドラ 愛美
沖縄県宜野湾市立長田小学校

全校児童 / 生徒数 664 名

学校背景

本校は琉球大学に近く、外国からの研究生の子どもたちや米軍関係の子どもたちが多く在籍している。今年度に、市内で3校目となる日本語教室を「日本語国際アイデンティティ教室」という名称で開設し、アメリカやフィリピン、タイ、アフガニスタン、南アフリカ、オーストラリアといった外国にルーツをもつ子どもたちが20名所属している。外国籍児童の多くは近隣の公立中学校へ進学している。

研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって
「多文化共生の文化」が必要なのか



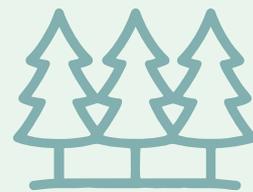
自分にとって

『～ができない』『～がない』『なおす』『やめる』にフォーカスするのではなく、自分自身の考え・心の形を書き換えていく（アップデート）作業を行い、自身の経験から子どもたちに伝え、還元していく。



学校にとって

多文化と出会い見つけたときに、子どもたちや教師は、どこで誰といっても自分が自分とちゃんとつながっておく。それによって、他者理解・多文化理解が築ける世界を創ることができる。



世界・社会にとって

多文化共生の文化に触れることで、自己理解をせざるを得ない。自分のルーツや文化を知ること、自分軸・自己愛を持ち生きることによって深く新しい多文化共生の世界が広がる。多文化共生が世界平和・地球平和を創る。


 現在の課題

外国籍児童の保護者の多くは、所属クラスで我が子が沖縄の子どもたちや文化に触れながら成長していったほしいと考えている。しかし、学校の中で十分な体制が整っておらず、外国籍児童がクラスの中で「お客さん」のような存在になり、その人らしさを見せられなかったり、周囲がその子理解をする場面を逃してしまったりしているように感じる。また、日本語教室担当は日本語指導だけが仕事だと勘違いされているのを感じる。


 現在の取り組み

日本語教室の名前を『日本語国際アイデンティティ教室』にすることで、ただ日本語を学ぶ外国人がいるクラス！という勘違いイメージを変えた。またアイデンティティ授業や掲示物を通して、外国籍児童が学校の中でスター性を持ち、多文化共生や国際理解教育の中心となって自分らしさやアイデンティティを発信する場をつくっている。その際には、自己理解と他者理解ができてこそ、本当の意味での多文化共生の世界を築けることを日本語国際アイデンティティ教室の子どもたちと共に発信している。

● 左記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

「多文化共生」には様々な形があること、そしてそれは外国にルーツをもつ人との共生だけでなくどんな人も持っているアイデンティティ（自分らしさの生き方・文化）があることがこの研修を通して更に深まった。私自身が香港生まれで、香港人としての生き方、日本人となった日からの生き方、どの国・場所・人と居たとしても自分と自分をちゃんとつなげながら自分軸を創ってきた。これが“自文化共生”の形である。その環境の中で多文化共生の世界と自然な形で関わってきた。教師となった自分がすべての経験を生かして今度は学校の世界で「自分らしさ」がわからず、出せずに悩むすべての子ども・生徒に、自分らしさを知って見つけるサポートをすること、また、子どもたちが自主的に多文化共生の在り方・創り方を考えられるような授業を、これからも続けていくことが大切であると感じている。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

「多文化共生の文化」の一步目として「自文化共生」を進めていきたい。「自文化共生」とは、生まれてから現在までの経験を、それがどんなものだったとしても認め、光を与えてあげる（肯定する）ことを私なりに表現した言葉である。そうすることで、多文化共生の中で、どこにいても、誰といても、ずっと自分と自分をつなげておくことができる。

「多文化共生」と聞くと、母国語ではない言語と出会うことへ不安を感じる人が多いかもしれない。しかし、初めから言語でつながろうとするのではなく、まずはお互いのアイデンティティを時間をかけてシェアすることで、次第に言語でのコミュニケーションも豊かになるのではないかと考える。そうするためには、一人一人が日頃から自分づくりに向き合い、自分のアイデンティティを知る、触れることが大切である。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

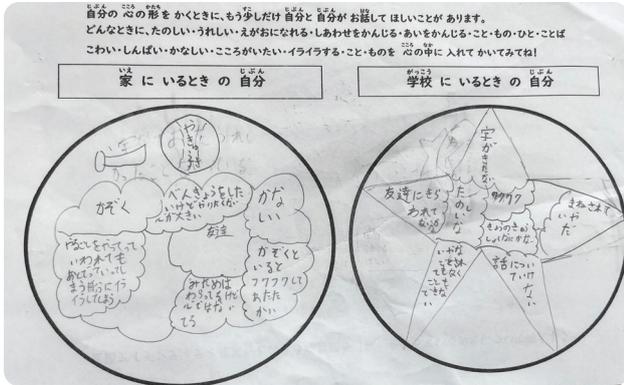
今取り組んでいる「アイデンティティ授業」を、より多くの子どもたちや先生たちと行い、発展させていきたい。

アイデンティティ授業は、アイデンティティワークシートを用いて、児童が自分自身を内観し、自分づくり（アイデンティティ構築）の力を育むことをねらいとする活動である。特別支援を必要とする児童や外国籍の児童を含め、すべての多様な子どもたちと共に取り組むことができる。

アイデンティティカード・ワークシートは、時や場所、共にいる人などで変化する自分のアイデンティティ（心の形）を見つめなおしながら、「外側の自分 / 内側の自分」を表現するためのものである。学校や家庭での自分の心の形や世界、そこではどんなものにどう感じているのかを振り返り、自分の強さや弱さ、幸せや愛について自己表現しながら深めていく。授業の導入では、担任の先生のアイデンティティワークシートを紹介する。



授業の様子



アイデンティティワークシート



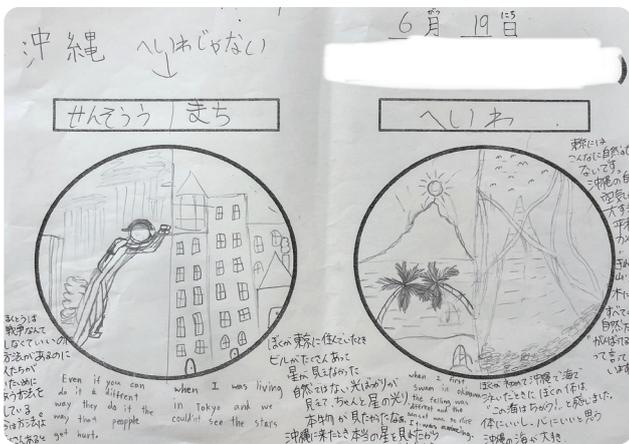
集大成アイデンティティカード



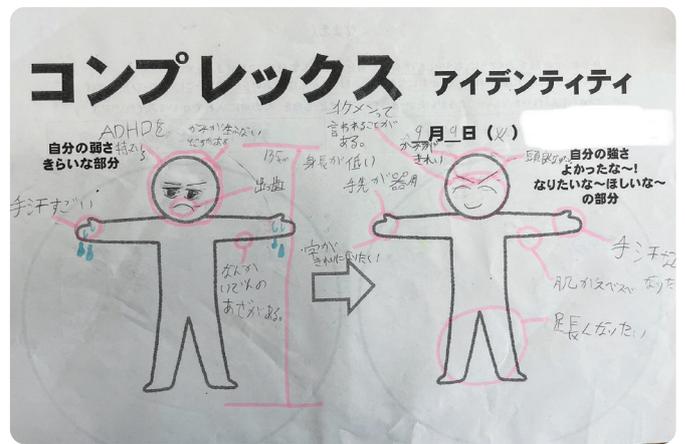
担任の先生のアイデンティティカード

現在は、所属する小学校の日本語国際アイデンティティ教室や通常学級の子たちをはじめとして、沖縄県の小中学校やアメリカンスクールなど年間30校ほど訪問授業を行っている。これからは地域や年齢を飛び越えて、より広くアイデンティティ授業を広めていけたらと考えている。

今は新しい試みとして、「親子でアイデンティティ」「平和アイデンティティ」「コンプレックスアイデンティティ」といった内容に取り組んでいる。「親子でアイデンティティ」では、子どもたちと保護者が一緒になってアイデンティティ授業に取り組むことで、お互いを「一人の人」として知ることができ、より深い関係を築くことをねらいとしている。「平和アイデンティティ」では、「自分にとっての平和」について考えることで、平和を「自分でつくる」ものとして捉えることをねらいとしている。「コンプレックスアイデンティティ」では、自分の外見的なコンプレックスを知ること、それを内側から「これが自分だ」という自信を持つことをねらいとしている。



平和アイデンティティワークシート



コンプレックスアイデンティティワークシート

私は、最終目標として「世界中の人々がアイデンティティ（自分づくり）を普段使いすることができる」ことを掲げている。年齢や性別、国籍、ハンディキャップのあるなし関係なく、すべての人がすてきな魂を磨き上げられる世界を目指し、これからも「アイデンティティ授業」を広げていきたい。

アイデンティティ授業についての
実践紹介スライド



外部機関との連携

<p>JICA 沖縄 JOCA 沖縄</p>	<p>JICA 教員研修、ウチナージュニアスタディでの県内の学生や、世界各地にいる沖縄にルーツがある学生たちとのアイデンティティワークショップを通しての交流。</p>
<p>琉球大学や沖縄大学などの沖縄県内の大学</p>	<p>教員や子どもと関わる仕事を目指す学生を対象に、「子どもの見取り方」や「子ども理解」につなげることを目的とした、アイデンティティ授業について講義を行う。併せて、ゲストスピーカーとして、日本語教室に通う子どもたちが、自分自身のアイデンティティについて講義の中で発表する。</p>

対話を大切に。 違いを受け入れる心を育てる多文化共生

河村 知里 | 愛知県豊明市立豊明中学校

全校児童 / 生徒数 600 名

学校背景

トヨタ系列の工場で働く人々のベッドタウンにある学校。特に本校の学区には市営団地があり、外国にルーツをもつ人が多く住んでいる。各クラス少なくとも4人ずつ外国ルーツの生徒がおり、合計約50人在籍している。出身国は、ベトナム、ブラジル、フィリピン、ペルーが多い。

研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって
「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

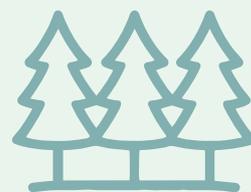
「違いを受け入れ、認め合う心を育てるため」

日本国内でも地域によって文化が違う。また外国とはより一層文化が違う。そのような世の中で、暮らしていくためには、「違いを受け入れ、認め合う素地」が必要だと考える。



学校にとって

学校に通う時期は、心が成長する時期。柔軟である時期に、違いを受け入れる心を育てることは必要。また、幼い頃から多文化共生について学ぶことで、社会に出ても、普通に受け入れることができるようになるため。



世界・社会にとって

元は、誰が偉い、どの国が偉いということはないと考える。しかし、現在は上下関係があるような状態になっているように感じる。お互いに平等な立ち位置で、共に認め合う社会にしていくためにも必要。


 現在の課題

外国籍の生徒の多くは、日本語習得に苦労したり、経済的理由などから、定時制高校への進学が多い。お金を貯める習慣があまりない家庭の生徒は特に進学に苦労している。

日本生まれ日本育ちの外国にルーツのある生徒もいる。教師側も、彼らのアイデンティティが日本に結びついているのか、それとも親の出身国に結びついているのか判断できず、話しかけたり関わったりする中で、結果的にマイクロアグレッションになってしまっていないかを懸念している。


 現在の取り組み

日本語支援

豊明市では、認定 NPO 法人プラス・エデュケートと協力し、日本語の初期指導を行なっている。中学校では、生徒と保護者の要望に応じて、教員が日本語の取り出し授業を行なっている。カルテに学習言語がどこまで習得しているか、どの部分が理解できていないか記録し、継続的に支援している。

国際理解教育の授業

外国にルーツをもつ子どもがいるので、配慮しながら多文化共生の授業を行なっている。話し合う活動をしっかりととることで、様々な考えに触れることができ、違った視点を学び、受け止める心を育てている。

● 左記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

本研修にて研修メンバー同士で話し合いをしている中で、「様々な考えや文化背景をもって人が、意見を出し合うことで、新しいものが生まれる」という意見を聞いた。意見を出し合い、受け入れるためには、お互いに対等に関わるのが大切だと感じた。そこに上下格差があると、上位の人のみの意見が通る状態になり、より良いものは生まれないと考えた。

矢野デイビットさんの「正しいことを伝えるのではなく、寄り添うことが大切」「自分の信じていることに裏切られることが一番怖い。そのため伴走者（支えてくれる人）が必要」という言葉。教員は、正しいことを教える職業であるが、それだけを伝えると子どもたちは受け入れることはできない。寄り添い、共に考えてくれる立場として、教員が必要であるとあらためて気付いたため。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

物事を多角的に見ることができる心を育てたい。自分の思いを押し通すのではなく、周りの意見も受け入れることができる心を育てたい。心が育っていないと、違いを受け入れることはできないし排他的な思考になってしまう。自分の正しさだけを押し通すと、成長はないと考える。幼い頃から、様々な違いを知り、それを受け入れたり、すべては受け入れることができなくても、少しでも受け入れたりすることができるようにしたい。違いがあるからこそ、新しいアイデアがつくられると思うし、発展する力となる。そのために、直接会って意見を交流させる機会をしっかりと設けたり、日常的に様々な違いを体験したりすることで、その素地をつくりたい。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

外国籍生徒の個別教育支援計画などに、「アイデンティティに関わる内容」も追記していく。

現在、「いつ来日したか」は書かれているが、それに追加として「子どものアイデンティティに関わる欄」をつくる。大前提として、信頼関係ができていないとアイデンティティを聞くことは失礼でもあるし、無理に聞くことは傷つける原因ともなる。また、アイデンティティは13～22歳頃に確立していくことが多いと言われている。まずは、何気ない会話や交流から始める。長期間関わる中で、「親の国の話を誇らしそうにしている。」「日本語しか話すことができない」などの小さなことを記録していく。それによって、見た目だけで「この子はブラジル人の親をもっているのに、ポルトガル語が話せる。」といったマイクロアグレッションになりうることを防ぐことができたり、その子どもの成長を系統的に見ることができたりすると考える。

掲示物の工夫

自分の国と日本の似ているところと違いをテーマに、掲示物を作ってもらい、掲示する。掲示物を通して、外国の文化について日常的に触れることができると共に、全然別の文化と思うのではなく、似ている部分もあるということ学ぶことで、親近感が湧くと考える。もし現物も展示することができたら、展示する。また、作成者である外国ルーツの子たちも、自分のアイデンティティの確立の一助となり得ると考える。ただし、これを行うには、その子自身が作りたいという意味があれば作ることを大切にしたい。外国にルーツがあったとしても、日本生まれ日本育ちの子もいるため、作りたい意思があれば作成し掲示していく。

地域文化の掲示物：日本国内にも都道府県や地域によって、様々な文化がある。それを掲示物として日常的に触れるようにすることで、違う文化に対して、受け止める心を育てることができると考える。

外国ルーツの家庭対象の進路説明会

外国にルーツをもつ子たちとその親向けの説明会を行う。その説明会には、外国ルーツをもつ卒業生なども呼び、進路選択時の苦労や高校生活や就職生活などについて語れる場をつくる。卒業生



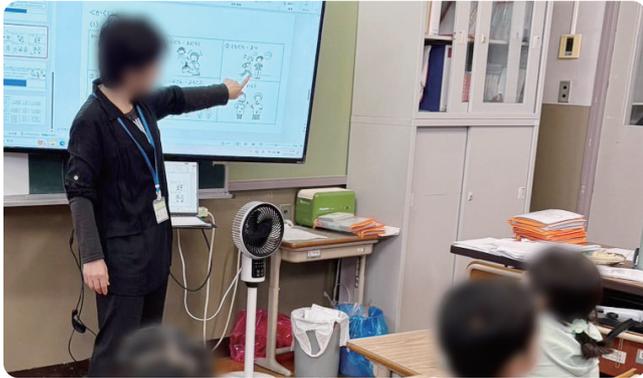
外国にルーツをもつ生徒が考えて作る掲示物
写真や実際のもを手にとって触ることができるようにする。



外国にルーツをもつ生徒に「有名なもの・紹介したいもの」をアンケートし、その内容をイラスト付きで掲示。

が実体験として語ることで、進路選択をどうしたら良いのか、保護者も子どもも考えることができる。可能ならば、親も呼ぶことで、親同士・子同士の交流会や進路相談会を実施し、より良い進路選択ができるきっかけづくりを行う。

● 現在の取り組み



日本語教室の様子
 プラス・エデュケートのご協力のもと、初期指導を行っている。



国際理解教育授業
 話し合い活動から多くの考えに触れることができるようにする。

日本語教室担当の先生へ

レベル別日本語指導の方法

生徒それぞれ日本語の習熟度が異なります。レベルは日本語教室に掲載されている「日本語教室取り出し時期表」の生徒名の後ろに①で示してあります。レベルに応じて下記の指導を行ってください。印刷してあるもの各担当室で印刷するものではありませんので、注意してください。レベルはあくまでも参考ですので、高すぎたり、低すぎたりする場合は、レベルを上下下げて対応してください。

【注意事項】

- 「日本語支援」と「学習支援」をバランスよく行ってください。
- ※ 漢字ばかりやるなどは避けてください。
- 日常日本語は、かかわ教室でも行っています。学習支援を通じた学習言語の習得をさせたいので、できる限り書いたり考えたりさせる活動を行ってください。
- 資料等は印刷していただいても良いですが、クローズアップで対応できることは極力対応して、眼の負担が少ないようにお願いします。

【レベル④】

【日本語支援】
 日常の日本語はほぼクリアされている段階です。学習支援を通して、学習日本語の習得を行う。

【学習支援】生徒に何がしたいかを聞く。良い。

- 長文読解・・・クローズアップで小学校4、5年生の国語のドリルを行う。
- 読書の補充・・・教科書や授業で使っているワーク、タブレットで補充を行う。
- 日本語検定・・・4級に挑戦
- 作文・小論文・・・何かテーマを決めて、簡単な作文をさせてください。

【レベル⑤】

【日本語支援】
 日常の日本語はほぼクリアされている段階です。学習支援を通して、学習日本語の習得を行う。

【学習支援】生徒に何がしたいかを聞く。良い。

- 長文読解・・・クローズアップで小学校6年生の国語のドリルを行う。
- 読書の補充・・・教科書や授業で使っているワーク、タブレットで補充を行う。
- 日本語検定・・・3級に挑戦
- 作文・小論文・・・何かテーマを決めて、作文をさせてください。

授業日	月	日	授業担当サイン	出席・欠席
教科学習	国・社・数・理・英・他()			
	教科書・ワーク・タブレット・他()			ページ
	国・社・数・理・英・他()			
	教科書・ワーク・タブレット・他()			ページ
日本語支援	みえごさんの練習帳・日本の学校生活・日本の社会生活・長文			ページ
	みえごさんの練習帳・日本の学校生活・日本の社会生活・長文			ページ
母語・母文化	内容			

日本語カルテ
 指導を一貫的に見ることができるよう記録する。

外部機関との連携	
認定 NPO 法人 プラス・エデュケート	日本語の初期指導を行なってもらっている。生活言語を学ぶことで、外国から来た子どもは日本での生活に適応できるようになる。
JICA 中部	ブラジルやフィリピンなど、各国の生活や暮らしにちなんだアイテムが入ったグローバルボックスを活用し、外国にルーツをもつ子どもたちが作成した掲示物とともに展示することで、それぞれの国をより身近に感じられるようにする。
豊明市国際交流協会	様々なイベントや外国人支援を行なっている。進路相談会などで協力をしていきたい。

社会科授業における多文化共生の文化の意識付け

野口 哲平 | 名古屋市立志段味中学校

全校児童 / 生徒数 985 名

学校背景

名古屋市に長く住む、地元の生徒が多い地域である。一方で、外国にルーツをもつ保護者もあり、進路や学習面で苦勞するケースも見られる。生徒の多くは穏やかで、学校行事や生徒会活動、授業の話し合い活動に協力的である。地域の特色として、学区内に児童養護施設があること、新興住宅地のため一軒家が増え、人口が増加傾向にあることが挙げられる。在校生が900人を超えたため、今後は新設校と分離する予定である。

研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



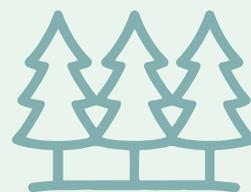
自分にとって

多様な背景をもつ人々が、学校や社会にいるのが日本でも当たり前になっている。「多文化共生の文化」というテーマに絞って、そのような人々と接点をもつことで、自身の価値観を広げるために必要だと考えるに至った。



学校にとって

学区には、日本社会や地域になじめていない人もいる。その中で、その人々が苦勞している事例を抽出し、解決することで学校生活や日常生活を前向きに捉えられるようになり、将来への不安も解消しやすくなると考えたため、その必要性を強く感じるに至った。



世界・社会にとって

多文化共生の文化は、古来より日本をより良くするために用いられてきた。国際競争が激しくなる中で、日本の強みを理解しつつ、世界の様々な文化を理解して活躍することができる人材は不可欠だと考える。その人材を育成するために必要だという思いに至った。



現在の課題

現在も協働的な学習を行っているが、多文化共生の文化に関する学習は十分とはいえない。また、昔から住む生徒、転入してきた生徒、外国にルーツをもつ保護者と生徒、施設で過ごす生徒など、背景は多様である。多文化共生の文化の学習を行うために、地域の実情に合わせて学習内容を整理する必要がある。

また、学校内だけの指導では、地域の多文化共生の現状を把握しきれない。生徒たちの視点だけでなく、地域全体が抱える多文化の現状を把握するために、明確な手立てを構築しなくてはならない。



現在の取り組み

世界地理では、日本（または地域）に在住する外国籍の人々と学習単元を結びつけ、外国の文化について見識を広げている。日本地理では、自分たちが住む地域の学習時に、地域に在住する外国籍の人々の文化について調査して理解を深めている。

歴史では、古代の東アジアとの関わり・安土桃山時代の南蛮文化・明治時代初期の西欧との関わりなど、多文化共生の文化が過去にも存在し、日本をよりよく発展させてきたことに気付かせて学習を進めている。

● 左記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

日本も国際的な国になり、身の回りに外国にルーツをもつ人が増えてきている。しかし、その実態はあまり分かっていない。そして、観光客も増えてきたことで、海外の人とのトラブルも増えてきている。そこで見えるのは、日本人と海外の人という大きなくくりだけで判断しているということである。

また、経済活動のためにやってきた海外の人は、日本はホームではなく、金銭を稼ぐための場所であると考えていることが分かってきた。これでは、多文化共生の文化を普及させるための共生関係が築けない。そこで、学校は経済活動から少し離れた立場にあるので、地域と海外の人を結ぶ機関になれるのではないだろうか。

まずは、自分の教育現場の多文化共生の状況を把握することが大事だと考える。その後、ゴールを定めて、どのような集団を作っていきたいか（そのためにはどんなことを気遣う必要があるのか）を考え合う段階を設ける必要があることに気付いた。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

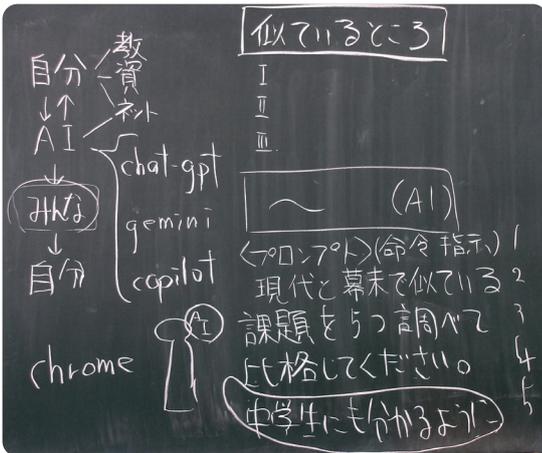
出身地・世代による考え方の違いなど、自分以外の人々と互いの文化を理解し合い、合意点を見つけ出し、自分が所属する（しようとしている）集団・国家を発展させるために協力し合えることが、多文化共生の文化ではないだろうか。

受け入れる側は、新しく転入してきた人々の背景を理解する必要がある。一方、新しく転入してくる側も、転入先の国の文化や背景を理解する必要がある。その上で、集団や国家を発展させるために話し合いや譲り合いができる社会を構築したい。そして、『新たな価値の創造』や『個人の成長』を成し遂げ、『困難を乗り越える覚悟』を双方で分かち合う必要があると考える。

学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

基本

学習指導要領の内容を軸に、発展的な学習として、多文化共生の文化について考える機会を設ける。中学生では、机上の空論になってしまうこともあるので、インターネットや生成 AI を活用して、自分の考えに足りないところを補強する活動を取り入れる。その後、グループで意見を交換し合うことで多面的・多角的な判断力を身に付けられるようにする。



生成 AI の使い方と活用の仕方



話し合い活動により、考え方を広げていく

自分の最終意見をまとめよう (最終考察)

※自分の意見をさらに深めよう。考えが変わった点や、新しく気づいた点なども含めて、あなたの「最終意見」をまとめてください。

<グループワークで考えが変わった点・深まった点>

近代化を進めるという考えはなくていいなと思った。
 平等や話し合い、自分の意見というワードが多くて、
 課題は違っても解決方法はにている点があるんではないか
 と思った。

③ 幕末の教訓を、現代の課題にこう活かすべきだ

選んだ課題：外国との関係

自分の考え：条約を結んだりするときはどちらの国も平等になるようにする。国の近代化を進めて発明をすれば外国の人にみせて日本はすごい！と思ってもらえる。外国ファーストみたいな感じではなく自国も大切にすることが大事だと思った。

Wファーストは難かしいのかしらね

歴史 2年 組 番 名前

確認 7.11.04 野口

グループワーク後、自分の考えを振り返り、ワークシートに記入する

地理

世界地理では、日本に在留している外国籍の統計人数を事前に調べておく。統計数が多い国の学習では、人文学的な内容も調べ、日本に在留している外国人の背景を学ぶ機会を設ける。日本地理でも、各地域で増えている外国籍の統計人数を調べることで、多文化共生の文化の必要性を体感させる。地域調査の單元では、「地域のルーツマップ」を作成する。地域に住む人々（生徒や家族）の出身地（都道府県や国）を地図上に記載する。これにより、「様々なルーツ」が学区という単位の中に存在することを視覚的に理解させる。国内の多様性（例：県外からの転入）に注目させるだけでも、自分とは異なる背景をもつ人が身近にいることを実感し、世界観を広げることができる。※注：個人の家を特定するのではなく、地域全体の傾向を記載するように配慮する。

歴史

近現代史における人の移動に注目させる。例えば、江戸時代の開国、移民の歴史、戦後の経済成長と外国人労働者の受け入れなど、多様な時代において、人々の背景が変化してきたことを理解させる。特に明治維新の前後は、外国からの影響を多く受け、日本が発展してきた時期である。この時、外国から得た知識や技術について、調べ学習によって内容を深めていけるように時間を確保する。最終的に、現代に注目させ、「日本も国際的な国になり、身の回りに外国にルーツをもつ人が増えてきており、より多文化共生の文化の必要性が増している」という現状を捉えさせる。

公民

「共生のためのルールメイキング」という活動を行う。日本国憲法の「基本的人権の尊重」や「法の下での平等」を学んだ上で、具体的な事例（例：宗教上の理由で給食が食べられない、日本語が分からず情報が得られない）を取り上げ、どうすれば全員が快適に過ごせるか、もしくは合意点を見つけ出し、お互いに納得し合えるルールを決定したら良いかを議論させ、共生できるルール作りを行う。

授業参観

「カルチャー・シェアリング会」を、社会科の発表会として授業参観で実施する。生徒が調べた「多様な文化」（地理）・「歴史的背景」（歴史）・「共生のための提案」（公民）を保護者の前で発表させ、大人も子どもも多文化共生の文化の必要性を学べる場を創出する。

外部機関との連携

JICA 中部(なごや地球ひろば)	JICA の研修員から、日本に住んで戸惑ったことを生徒に伝えてもらう。
公益財団法人 名古屋国際センター (NIC)	外国にルーツをもつ人が、日本の進路や就職に関わる事で困ったことを生徒に伝えてもらう。
公益財団法人 愛知県国際交流協会 (AIA)	愛知県全体の国際交流を推進している団体と学校をつなげる情報提供を依頼する。

世代や国籍を超えて～多文化の日常に気づく

川村 昌広 | 京都市立洛友中学校

全校児童 / 生徒数 39名

学校背景

1968年京都市立郁文中学校に二部学級（夜間中学）が設置され、2007年不登校特例校の昼間部と共に学ぶ「洛友中学校」として新たに開校した。夜間部の生徒は様々な理由で義務教育を修了できなかったまたは形式卒業した学齢超過者である。21名中11名はネパール、韓国、フィリピン、中国など外国にルーツをもつ生徒たちで、来日時期や日本語習得状況も様々である。

研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



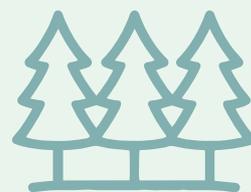
自分にとって

ことばや考え方のちがう人を理解するために必要な考え方。一緒に活動（行動）するときの基準になる。
相手の考え方や行動を認めることによって、自分についても気づくことができる。



学校にとって

学校の日常が多文化の空間である。他の人と自分とのちがいに気になったときに、どうしても自分の「当たり前」を優先してしまい、お互いの「ふつう」を知らないことがトラブルの原因になるから。



世界・社会にとって

価値観や背景が異なる人たちが、一緒に生活していくために必要なものの見方、考え方。
それぞれの人にとってのふつうやあたりまえ（文化）が大切にされるための準備として、お互いのことを知ろうとする意欲（興味）が必要。


 現在の課題

本校には幅広い世代や国籍の生徒が在籍しており、日常そのものが「多文化」の環境である。その中で、お互いに自分ないものを認め合い、自分の強みを知って自信を持ち、積極的に他者と関わる姿勢を育てていくことが求められている。そのためには、授業においてどのようなサポートが必要か、また効果的な支援とは何かを継続的に検討する必要がある。あわせて、誰にとっても居心地がよく使いやすい学校ユニバーサルデザインの実現や、生徒自身が自分に興味を持ち、ありのままの自分を認められているか、自分と「ちがう」相手を大切にし、関心を持てているかが課題となっている。


 現在の取り組み

来日直後の外国にルーツをもつ生徒に対し、国語に加え、前期は社会・理科の時間でも日本語指導を行っている。それ以外の教科では、配布するプリントにルビを振り、基本的に日本語で進めつつ、必要に応じて英語などで補足を行っている。生徒のルーツにちなんだ中国やフィリピンの料理に取り組んだ。時間割の中に昼間部と夜間部の生徒と一緒に活動したり、学習したりする交流の時間を設定している。実技教科、清掃活動、文化祭に向けた取り組みや生け花、陶芸、書道の体験の他、校外学習・修学旅行、人権学習の合同実施に取り組んでいる。

● 左記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

「他人のことを理解するためには、その前に自分の個性（アイデンティティ）を知って肯定的に認めて（好きになって）大事にできることが必要」（阿部さん）

「ガーナで出会った難民の少年に幼き日の自分を見て、自分の生まれてきた意味に気付いた。自分の意識や考え方で目の前の人がちがって見える。『正しいことを指摘するより、明日から勇気を持って生きられるようにただよりそうこと』自分の正しさを主張し、相手を批判することで、対立しづつかってしまう。寄り添いや寛容が大切。」（矢野デイビッドさん）

自分の個性を知った上で、他人の生き方（文化）に興味や関心をもつことが一緒に生きていくためにとても大切なのだと思った。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

自分の文化（当たり前）から他の人の文化（ふつう）を知り、そしてさらに多くの他文化（多文化）へと関係性を広げていく。

まずは自分のことを知り、自分の個性（アイデンティティ）に自信をもって好きになる。それを周りに受け入れてもらうことで、安心を感じて、自分の居場所をつくることができる。そして相手の話を聞く。それによって相手のことを知り、ちがいを認められるようになる。一人一人とそのような関係ができると、集団としてのクラスでお互いのことを知って、認められるようになり、集団や構成メンバーのことを好きになる。（としいなあ）



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

(1) 日々の授業における配慮

- ・ 授業の進め方の確認（あいさつ、忘れ物、宿題、ノートの取り方など）
- ・ 授業資料（プリントやパワーポイント）作成時にルビふり、英訳をつける。
※簡単に（自動的に）ルビ振りができるとよい。
- ・ タブレットやスマホの利用
- ・ テスト作成時にルビふり、（英訳添付）する。一部、英語や母語による解答も可にする。
- ・ それぞれが学んできたことを生かす教材・学習内容の工夫（写真1）
- ・ 日本語以外の教科書を使って授業を試してみる



（写真1）夏休みの宿題として、自分のことばで覚えた九九を、段ごとに録音し練習

(2) 多文化共生を目指した活動や授業の計画・実施

- ・ いいとこさがし
- ・ 学校ユニバーサルデザイン
- ・ やさしい日本語の活用（UD 文書）：学校からの配布物を読みやすく、わかりやすいものにする
- ・ アイデンティティ授業

【実践例】 交流学習の取り組み

- ・ 文化の違いや非識字を体験するミニワークショップを行った。（写真2、3）



（写真2）写真を見て気付いた（ちがう）ことを話し合う参加者



（写真3）「ちがい」や「わからない」を体験するミニワークショップ

【実践例】人権学習の取り組み

今年度の人権学習は「多文化共生の中で人権を理解し、互いに尊重し合う」をテーマに3日間に分けて行った。(3コマ)

①「文化って何だろう？人権の基礎を学ぶ」

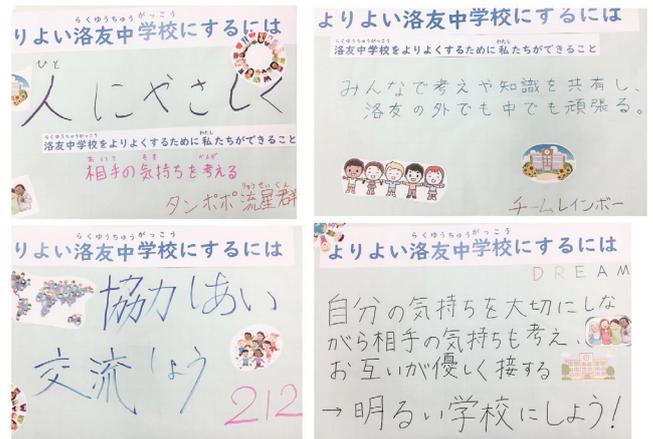
- ・「文化の違いを認めることは、そのひとの“らしさ”を守ること」

②「多文化の声を聴く」

- ・ゲストティーチャー（来日30年、インドネシア人講師）によるお話
「アイデンティティは権利でもあり、義務でもある」
「共生は同じになることじゃない」
「文化の違いは当たり前」

③「わたしたちにできること」

- ・「洛友中のいいところさがし」、「学校をよりよくするためにわたしたちにできること」という2つのテーマについて交流グループで話し合い、発表した(写真4)



(写真4) グループで考えた学校をもっとよくするためのアイデア

(3) 地域との関わり

- ・生徒の多くが地域に住んでいないので、意識的に地域に関わり、交流を通して、学校の取り組みを紹介する。例えば、行事に招待したり、チラシを配布したり、ポスターを貼ったりする。また、生徒が地域の活動に参加する（お互いに知る、知ってもらう）

(4) ネパール人生徒のための教科用語集（授業用語集）の作成

外部機関との連携	
京都市国際交流協会	留学生が多数登録しており、国際理解プログラム（PICNIK）を学校向けに提供している。人権学習の講師派遣でお世話になった。
京都府国際センター	外国ルーツの児童生徒への支援や進学などの進路について相談にのってもらっている。
JICA 関西（京都デスク）	出前講座や研修員との交流など開発教育を支援するプログラムがある。
協力隊ネパール会、NPO SEWA	JICA 協力隊のネパールOV会とネパールOVが中心に立ち上げた在日ネパール人を支援するNPO
外部ではないが、自分が所属する研究会など	京都府OV教員研究会、京都市国際教育・グローバルキッズ研究会、京都海外子女教育・国際理解教育研究会（日本人学校）

「私でもない、あなたでもない、世界の誰かのために。」 ～多文化共生の実現にむけて～

小川 亮 | 北九州市立門司中学校

全校児童 / 生徒数 264 名

学校背景

北九州市立門司中学校は、九州の玄関口北九州市門司区に位置し、264名の生徒が在籍している。校区には門司港があり、明治から昭和初期にかけて日本有数の産業・貿易拠点として発展してきた。現在「門司港レトロ」として国内外から多くの方々が観光に訪れている。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって
「多文化共生の文化」が必要なのか



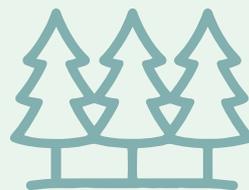
自分にとって

教師自身が様々な人や文化を学び、知識や技能を身に付けることにより、多様な生徒に対応できる力を身に付ける。また、それらを生徒の発達段階に応じた指導に取り組むことで、互いに尊重し合える集団づくりに努める。



学校にとって

観光地の特性を生かし、地域での活動を増やすことにより、多文化理解、地域活性化を推進する。また、生徒一人一人を互いに尊重できる力を身に付けると同時に自己理解につなげる。



世界・社会にとって

生徒の将来の社会参加やグローバル社会の進展に向け、社会の一員として活躍できる力を身に付ける。様々な文化を尊重し、自己の特性を生かしながら互いに認め合える社会の構築・世界平和につなげる。


 現在の課題

現在、特別支援学級の担当をしており、知的障害特別支援学級、自閉・情緒障害特別支援学級合わせて16名の生徒が在籍している。日々の指導・支援より特別支援学級に通う生徒は通常学級の生徒に比べ、日々の失敗の多さから「自信のなさ」や「自己肯定感の低さ」が強く、他者との関わりに消極的な生徒が多いと感じており、様々な関わりを通して、自分から他者に対して関わられるようになって欲しいと思っている。


 現在の取り組み

これまで、障害をもつ子ども達の「自立」と「社会参加」に向け、ecoをテーマに人とconnectする「econnect project(エコネクトプロジェクト)」を立ち上げて活動している。econnect projectでは、ESDやSDGsの目標の達成や本市の環境都市の特性を生かし、「社会貢献」「被災地支援」「国際交流」の3つの分野で20を超える活動に取り組んできた。多くの人とつながり、協働して課題を解決することで少しずつ自分から他者に働きかけることができるようになってきている。

● 左記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

「私でもない、あなたでもない、世界の誰かのために。」

研修受講前、多文化共生とは、「他者の文化を理解し尊重すること」と理解していた。多文化を理解し、受け入れることが重要で、他の文化を受容することができれば多文化共生社会が実現するものであると考えていた。しかし、今回の研修や意見交換を通して、互いに文化を理解し合うことが重要で、自分自身が多文化を理解しようとも、相手に他の文化を理解しようとする気持ちがなければ多文化共生は成立しないことに気付いた。互いの文化・個人を尊重し、歩み寄ろうとする姿勢が重要であると考えようになった。

私の多文化共生の実現の最終目標は、「私でもない、あなたでもない、世界の誰かのために」。世界の課題を知り、私とあなたが個々の特性を生かしながら協働することで、より一層の多文化共生の実現、生徒達の深い学びにつながるのではないかと考えるようになった。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

私が目指す多文化共生の文化は「国籍、人種、性別、障害の有無等関係なく、一人一人が尊重し合い、互いに認め合える文化」である。その実現には生徒に二つの力を身につけさせる必要があると考える。まず、「相手の声に耳を傾け、思いやり、自分から行動することができる力」、そして二つ目は「違いを受け入れ、共に手を取り合い課題に向き合う力」である。この二つの力の習得を意識しながら日々の指導に取り組み、生徒たちに身に付けさせることで、互いに認め合える環境を整備する。互いを理解し、共に成長しながら、新たな課題に協働することができた時、本当の多文化共生の文化を実現することができると考える。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

現在、特別支援学級の担当をしており、知的障害特別支援学級、自閉・情緒障害特別支援学級合わせて16名の生徒が在籍している。日々の指導・支援より特別支援学級に通う生徒は通常学級の生徒に比べ、日々の失敗の多さから「自信のなさ」や「自己肯定感の低さ」が強く、他者との関わりに消極的な生徒が多い。様々な関わりを通して、自分から他者に対して関わられるようになって欲しいと考えている。

また、これまでに様々な国と交流し、多文化理解の授業を実践してきた経験から課題と感ずるのは「多文化への理解へ興味・関心はあるが、活動に消極的に参加する生徒が多い」ということである。現在、インターネットを使うことで、世界中の文化や生活など多くのことを知ることができるが、実際に世界の国々とのオンライン交流やアンケートの結果から、海外への興味・関心はあっても、自分から多文化理解を深めようと活動に進んで参加する生徒が少ないように感じる。

そこで、実際の多文化共生の文化の学習に取り組む前に、生徒自身の自己理解・他者理解の学習を追加することにより、生徒たちの多文化共生の基盤ができ、より効果的に学習に取り組めると考えた。

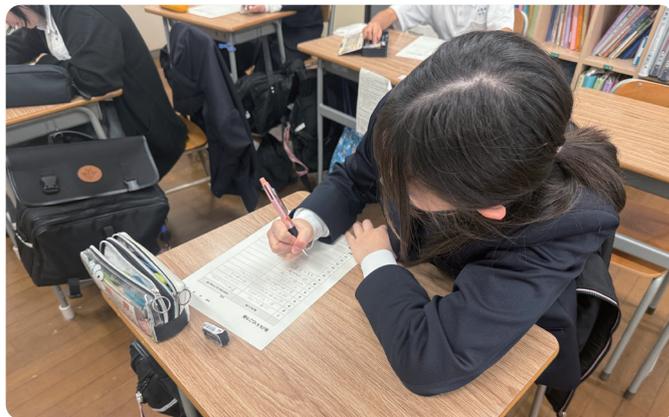
多文化共生の基盤となる生徒へのアプローチ

● Step1 自己理解の学習

- ① 自己の特性を確認し、自己理解を深める。
- ② 自己の特性や長短所から自分ができることについて考える。

● Step2 他者理解の学習

- ① 他者の意見や考えに触れ、様々な考えがあることを知る。
- ② 自己と他者の違いに触れ、共通点・相違点について考える。



自分の長所・短所について整理し、自己の特性について考える自己理解学習

多文化共生の取り組み

● Step3 多文化共生の文化の学習

- ① 他の文化を知り、自国の文化と比較し、共通点・相違点について考える。
- ② 諸外国の文化をまとめ、校内に掲示することで理解を深める。
- ③ JICA 九州オンライン出前講座の実施。
- ④ 海外教育機関とのオンライン交流を通して、文化の違いを体験する。
- ⑤ 社会や世界の課題を考え、何が必要か。また、何ができるかを考え、それらの課題に取り組む。

多文化共生の文化の実現には、継続した指導・支援が必要であると考えます。日々の取り組みや事前授業の充実により、多文化共生の文化の実現を目指していきたい。



校区には門司港レトロがあり、国内外から多くの観光客が訪れている



eco をテーマにして人と connect する econect project



ケニアの学校とオンラインで交流し、日本の箸を紹介



社会科の時間を使い世界の国々について調べた内容を掲示し、紹介

外部機関との連携

地域・地元企業	校区の観光地の特性を生かし、地域の活動に参加。外国人観光客へ向けた案内や観光マップの作成等、多文化と触れる機会を増やす。
海外の教育機関（予定：ケニア・インド・アメリカ）	オンライン交流を実施。様々な国の子ども達との交流を通じて、海外の文化に触れる機会を作る。協働プロジェクトの計画・実施。
JICA 九州	オンライン出前講座の実施。協力隊の活動や現地での文化の違いや共生に向けて必要なことを学ぶ。

convivial な学校を目指して

高木 大作 | 市立札幌藻岩高等学校

全校児童 / 生徒数 711 名

学校背景

各学年に、両親どちらかが外国籍である生徒（イギリス、アメリカ、オーストラリア、フィリピン、ネパール、トルコ、中国など）が、5～6名ずつおり、その数はここ数年で増加している。北海道では、ニセコ、トマム、留寿都などの地方で、観光業や農業に従事する外国人の人口に占める割合が高くなっている。札幌市でもここ数年、飲食店や製造業に従事する外国人が増えている。

研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



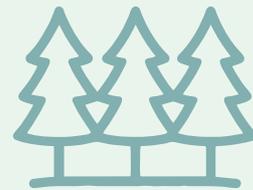
自分にとって

異なるヒト、モノ、コトを知り、体験・交流することで、また違いが融合することで生まれるイノベーションや新しいアイデアに触れることで、自身のウェルビーイングを高めることができると考えているため。



学校にとって

「多文化共生」の mindset が必要とされている社会に、若者を送り出す教育機関として、外国にルーツをもつ生徒の多寡に関わらず、多様な価値観を認め尊重し合える convivial な学校でありたい。



世界・社会にとって

紛争・戦争が絶えず、また対立や分断が進む今日の社会情勢の中であっても、国を超えた地域や人々とのつながりから育まれる相互理解の積み重ねによって、人々の心の中に「平和のとりで」が築かれていくと考えられているため。


 現在の課題

高校入学段階でそれ相応の学力水準が求められていることもあり、外国にルーツをもつ生徒が、学校生活を送る上で困難を抱えている様子は見られていない。(ただし生徒同士の会話を耳にすると、外国にルーツをもつ生徒へのマイクロアグレッションにつながりかねない発言が聞かれることもあり、その対処は丁寧に適切に行わなければいけない)。そのため、「多文化共生の文化」について、「差し迫っている課題ではない」と捉えたり、多文化共生を英語教育の文脈で語ったり、といった我々教員の無関心さや誤解が課題であると考えている。


 現在の取り組み

1年次総合的な探究の時間において、SDGsの視点で、地域や社会、世界が抱えている課題を多面的・多角的に捉えるワークショップ体験と、地域や世界を舞台に活躍されている方々との交流・対話のプログラムで構成された「グローバル概論」と呼ばれるプログラムを行っている。また単位制の特徴を生かし「グローバルシティズンシップ」という学校設定科目を開講している（「今後取り組みたいこと・アイデア」にて後述する）。本講座の取り組みが、所属校での「多文化共生の文化」を創っていく一役を担えたらと考えている。

● 左記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

私が、「多文化共生」を強く意識するようになったのは、JICA 海外協力隊員としてカンボジアに滞在した経験、つまり、「外国人」という立場で地域の中で暮らした経験が背景にある。この海外生活では、言葉や文化の違いによる疎外感、異なる価値観への戸惑い、互いを理解し尊重し合うことで生まれる安堵感、違いを乗り越えて生まれた多幸感などを身をもって体感した。そして、帰国後、日本に住む外国人や外国にルーツをもつ方々の背景に、これまで以上に想いを馳せ、関連する諸課題にも思考を巡らすことが多くなった。

今回の研修では、「多文化共生」の「多文化」を“他”文化と置き換えてみることで、「多文化共生」を身近にいる異なる他者と共に生きること、と捉えることができるという学びがあった。「多文化共生」の考え方が、誰にとっても身近なものとなれば、このことが、「多文化共生の文化」の創造に向けた確かな一歩になるのではないかと、という想いに至った。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

年度当初、1年次の主任として、年次運営をする中で大切にしたいことを年次担当教諭と生徒たちに共有し、その想いを年次通信のタイトルとした。それが、「わ」である。「わ」に込められた想いは、『新たなヒト・モノ・コトとのつながりの「輪」、互いを理解し尊重し深め合っていく対話の「話」、一人一人が大切にされ一つのハーモニーが生まれていく調和の「和」、そして安心安全な土壌から「未来へと羽ばたいてほしい」という願いを込めた「羽』である。この4つの「わ」を育むことで培われる文化は、まさに「多文化共生の文化」と言い換えることができるのではないだろうかと考えている。一人一人が「多文化共生の文化」の創り手であるという当事者意識を持てるような機会や場を創り、じわりじわりと「多文化共生の文化」を創っていききたい。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

1) 学校設定科目「グローバルシティズンシップ」の認知度と受講者数の UP

この講座は、単位制の特徴を生かした本校オリジナルの講座であり、①多様な文化、習慣、考え方を認め合うことができる、②地域や世界の諸課題について、多角的な視点から捉えようとすることができる、などの資質能力を持つ生徒の育成を目標としている。

具体的な取り組みとして、以下のように多岐にわたっている。

- ・バーチャル旅行：イラン、アメリカ、エストニアの在住者、あるいは在住経験のある方から、その国の文化、制度、価値観、考え方などについて紹介して頂く。(写真1)
- ・異文化交流プログラム：ネパール、ミャンマー出身の実習生との両国の文化紹介・体験(写真2)
- ・外国人労働者の受け入れの是非についての討論
- ・未来の『平和』を考える：テヘラン日本人学校の現地職員から、イランとイスラエルの紛争の現状についての報告、及び生徒との質疑応答。その後『積極的平和』について考えるためのワークショップ
- ・課題調査研究：例えば、研究テーマとして、「絵本から日本と外国の教育観の違いを比較し、多文化理解を考える」「日本人と日本の食を支えている外国人は共生していると言えるのか」など。

講座を設立して3年目になるが、受講人数は毎年10名前後である。授業後に行うアンケートでは、受講者の満足度は非常に高く、生徒の中から、「すべての生徒が受講すべき講座である」との声も聞こえてくる。また複数の生徒が、本講座での学びを大学受験に活かしている事例もある。校内研究紀要の執筆、学校HPへの掲載などにて、講座の価値と必要性を積極的に発信すると共に、この講座に協力してくれる関係者を増やしていきたい。



(写真1) エストニアに15年在住経験のある方からの講話



(写真2) 地元企業で働くネパールとミャンマーの方々との異文化交流

2) 「対話」の文化の醸成

「多文化共生の文化」を創るためには、「対話」の文化が必要不可欠な要素であり、日頃から様々な教育活動の場で「対話」が生まれる環境を作っていきたい。

① 総合的な探究の時間における「対話」のプログラムの充実

活動後のリフレクションを丁寧にいき、生徒同士の「対話」の機会をプログラムに盛り込んだ。単なるおしゃべりの時間とならないよう、「対話」の意義や方法を丁寧に説明し、地道に実践を続けているところである。(写真3)



(写真3) 総合探究のプログラム後、生徒同士の対話を通してリフレクションを実施

② 「対話」をテーマとした教員研修の開催

①の実践を進めるにあたり、「対話」を正しく深く理解し、「対話」を促すための場づくりやファシリテートを実践できる仲間、教員を増やしたい(自分自身もそのような力を育みたい)。そこで、教員自らが「対話」を体感しながら、「対話」の方法や意義を理解できるような研修プログラムを、校内研修として企画・実施したい。

③ 放課後 toi-time の開催

放課後の企画として、特別ゲストと、安心して交流・対話ができる場を創る。第1回目は、カンボジア国内で、教育支援を行っている方をお迎えする予定である。

外部機関との連携

JICA 北海道 (札幌)	生徒の地球ひろばへの訪問。北海道を訪問中の研修員、多文化共生に取り組んでいる市民団体や企業等を紹介して頂く。
北海道青年海外協力隊 OV 会	世界 90 カ国以上に派遣されている協力隊 OV のネットワークの活用。各地で、協力隊 OV が主催、協力しているイベントの生徒への紹介。
一般社団法人 グローバル推進教育プロジェクト (GiFT)	双方向型のコミュニケーションを重視したワークショップを多数手がけており、研修時の講師派遣などで協力をお願いします。
株式会社 NINAITE	北海道で外国人の人材紹介や就労支援を行っている。ミャンマー、インドネシア国籍のスタッフを講師として派遣して頂く。
株式会社ラルズ	北海道を中心に展開するスーパーマーケットであり、ミャンマー、ネパールからの実習生に来校して頂き、生徒と交流を図った。

自己理解 ⇄ 他者理解 ⇄ 国際理解

身近なところから創る多文化共生の第一歩

吉田 圭佑 | 北海道札幌南陵高等学校

全校児童 / 生徒数 175 名

学校背景

本校は北海道内でも人口が最も多い札幌市に所在しているが、学校自体は小規模であり、全校生徒数は170名程度である。その中でも保護者が外国にルーツがある生徒は少数ながら存在している。(韓国、中国、フィリピン、パキスタン) また、学校周辺の地域を見ても外国籍の労働者は以前より増えている。今後も外国にルーツがある生徒や地域住民は増えていくことが予想されている。

研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって
「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

● 他者（生徒等）を深く理解し、適切に教育活動を行っていくために。今後の地域社会で多文化共生の視点が重要なことだと考えているから。自分自身がより良く、前向きに生きていくために。



学校にとって

● 多文化共生の意識が根付くことで、自己理解の深まりや適切な他者理解につながると考えている。多くの生徒の社会性が高まるきっかけとなる。海外にルーツをもつ生徒は今後増加していくと予想されるから。



世界・社会にとって

● 環境問題など世界でつながりを持って取り組むべき課題が増えている。共に何かを作っていくためには他国への理解が不可欠だと思う。より良い社会・世界を作っていくために重要な文化の一つだから。


 現在の課題

本校は地域性や少子化の影響もあり、生徒数が減少しているのが現状である。そのため、学校の魅力発信や生徒数を増加させるための教育活動に力を注ぐことが大きな課題となっており、多文化共生への課題意識は低く、国際的な多文化共生の視点や必要性については学校全体では感じられていない。しかし、学校周辺には観光資源も多く、外国籍の観光客や労働者も増加している。今後は学校や地域でも外国籍にルーツをもつ人が増え、共生していくことが求められるため、今から国際的な視点を持ちながら教育活動を行うことが重要だと考えられる。


 現在の取り組み

校内では教科内での国際理解教育の推進がメインであり、学校全体での組織的な取り組みはほとんどないのが現状である。教科内の取り組みでは発展途上国と日本の環境や文化の違いに目を向け、人々の置かれている状況を多角的な視点から考える授業が展開されている。今後は本校も日本語を話すことができない外国にルーツのある入学者が増加する可能性も十分あるため、多文化共生に向けた教育の推進が求められる。

● 左記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

研修では全国から集まる先生方と多文化共生をテーマに多くの話をする事ができた。多文化共生を考えるときには国際的な視点が取り上げられることが多いが、日常生活の中でも一人一人が多様な文化を有していることにあらためて気付いた。地域・言葉（方言）・家庭・家族構成など日本国内においても多様な文化やルーツがあり、学校や職場で日頃関わっている人々にも多（他）文化がある。そして、多文化共生を考えるときの大切な視点として「自己理解」があるのではないかと私は研修を通して強く感じた。昨今、他者への理解を意識する機会は増えているように感じるが、自己理解を深める機会は意識的に設けないと意外と少ないように感じる。自己理解を深め、自分の文化やルーツと向き合うことで、適切な他者理解が生まれるのではないかと考える。「自己理解」を適切な「他者理解」へとつなげ、国際的な視点を育み、「国際理解」へとつなげていきたいと思う。（P59 図1）

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

本校では「社会的自立のスタートラインへ」という教育目標を掲げ、ダイバーシティ教育（多様性・共生）も推進している。良好な社会生活を送るためには他者との関わりが不可欠であるが、現代社会ではデジタルデバイスやSNSが普及し、他者とのオフラインでのつながりは希薄になりつつあるのではないかと感じている。そのような現代において、他者と関わる上では本校生徒には「人に優しい」人間へと成長してほしいというのが私の個人的な願いである。優しさとは何なのかと問いを立てた時に、答えを導き出すために必要なピースが「多文化共生」なのではないかと思う。また、そのような思いを教育活動を通して具現化していくためにも、私自身が多文化共生を深く学び、探究していく必要があり、今後の教員人生の一つの大きなテーマなのではないかと感じている。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

本校が多文化共生の文化をどのように創り上げていくのかについては大きな柱が3つあると考えている。

①総合的な探究の時間

②進路活動

③教科指導

この3つの場面で様々な教育活動を国際的な視点も交えながら掛け合わせていくことが重要だと考える。

本校の総合的な探究の時間では「自己理解とマイライフプラン」という時間を設定している。今までは自己理解の内容として自身の目標や性格等に重きを置いていたが、今後は自分の文化・ルーツにも目を向けることで多文化共生への理解を推進する入り口となると考えている。

本校が所在している札幌市南区藤野は北海道内で人口が最も多い札幌市において最も高齢化率が高い地域である。本校は総合的な探究の時間で地域探究を行い、地域に住んでいる高齢者の方々がどのようなことに困り、課題を感じながら生活しているのかを調査している。その調査に基づき、地域課題を高校生が解決に向けた方策を考え、高齢者と意見交換・発表する活動を行っている。これらの活動は地域や異年齢集団という文化やルーツを知るなど、他者理解に向けて非常に重要な学びとなっており、今後も深めていくべき活動である。

進路活動においては本校は3割程度の生徒が卒業後の進路として就職を選択している。北海道内でも外国籍の労働者は徐々に増えてきているので、職場で外国籍の方々と関わる機会が増えることが予想される。今後の進路活動では企業の就業についての条件だけに目を向けるだけではなく、グローバルな視点も持ちながら、企業や就業場所を探究していくことが求められる。

教科指導においては教科の特性や学習指導要領の内容を踏まえながら、国際理解や多文化共生の視点を教科横断的に取り入れていく必要があると感じている。校内で多文化共生の文化を創り上げていくためには、特定の教員だけが文化の創出を行うのではなく、多くの教員が関わりながら、それぞれの持ち場で少しずつ国際理解や多文化共生のエッセンスを取り入れた教育活動を行うことが重要だと考えている。

今後は既存の教育活動に国際的な視点や多文化共生の要素を加えながら、自己理解から他者理解、そして国際理解へとつなげていきたいと考えている。そして、多文化共生の土台が校内に醸成できた時には、グローバルな視点を磨き、外部機関やJICA海外協力隊OV会(OB/OG)などとも連携しながら、海外のリアルを深掘りしながら、生徒と共に探究していきたいと考えている。

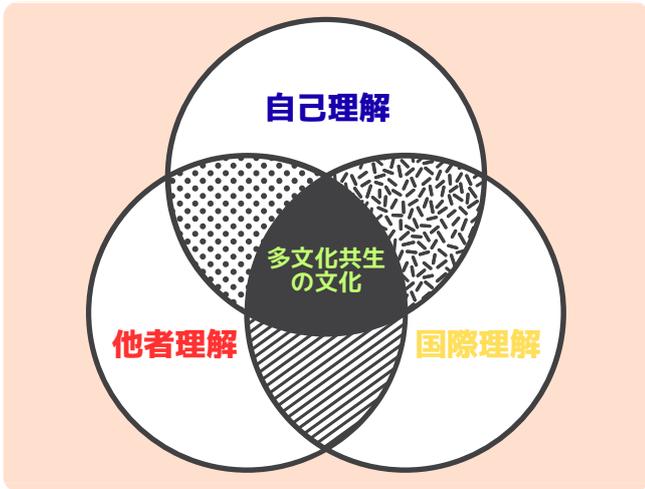


図 1



国際理解教育に向けたグループワーク（保健体育）



地域課題についての生徒と高齢者との話し合い



高齢者の運動課題の解決を目指した生徒による運動指導

外部機関との連携

JICA 地球ひろば	多文化共生や国際理解に必要な情報や資料を幅広く提供していただき、教育活動を充実させる。
JICA 北海道（札幌）	北海道独自のグローバルな情報を共有させていただく。また、教職員や生徒が JICA 北海道を訪れて、研修の機会とする。
JICA 海外協力隊 OV 会（OB/OG）	学校での講演会や、オンラインでの交流会を実施し、海外がより身近で、様々な文化の違いがあることを生徒に発信していく。

すべての人にとって優しい世界を探究する

塚越 一江 | 埼玉県立大宮中央高等学校

全校児童 / 生徒数 369 名

学校背景

活動生に限定すると、その約1割は外国にルーツをもつ生徒である。川口市に近い地域特性もあり、出身国は中国、ベトナム、クルド、フィリピンなど多岐にわたる。定時制高校の特性上、日本語学習の初期段階にある生徒も少なくない。また、国籍に限らず多様な背景をもつ生徒が在籍しており、大学のように自由な校風の学校である。

研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって「多文化共生の文化」が必要なのか



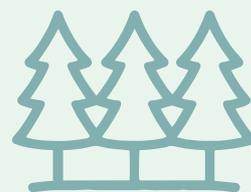
自分にとって

同じ文化圏だけで過ごす
と視野が狭まり、発想も固
定化してしまう。異文化に
触れることで、新しい価値
観を取り入れ、自分を成長
させられるため、多文化共
生の文化が必要である。



学校にとって

学校は多様な文化や背景
をもつ生徒が共に学ぶ場
であり、互いを尊重し支え
合う文化が不可欠である。
さらに、外国ルーツの生
徒が将来困らないよう、
日本語教育や職業体験な
ど支援してくれる外部機
関連携も重要となる。



世界・社会にとって

人口減少が進む日本では、
在留外国人と共に暮らす社
会づくりが不可欠である。
互いが快適に生活できるよ
う、多言語対応や生活マナ
ーの共有など、多文化を前
提とした仕組みへの転換が
求められる。


 現在の課題

本校には外国ルーツの生徒が一定数在籍しているものの、日本語指導や学習支援は個々の教員の努力に頼っており、組織的な支援体制が十分に整っていない点が課題である。日本語力や文化的背景の違いに応じた共通方針がないため、提供される支援にばらつきが生じやすい。また、校内そのものが多文化社会であるという利点を十分に生かしきれておらず、生徒同士が互いの文化を理解し、学び合う機会が限定的であることも課題の一つである。


 現在の取り組み

総合探究では「やさしい日本語で国際交流」をテーマに、自国と交流国の双方が幸せに生きる関わり方を探究している。やさしい日本語は、実際に使うことを目的とし、提唱者による出前授業や、日本語を学ぶ海外高校生とのオンライン交流を実施した。また、「やさしい日本語作文コンテスト」の課題動画を基に対話活動を行い、学びを行動へ結びつけ、多文化共生への理解を深めた。さらに英語の授業では、おすすめのお菓子を紹介するプレゼンテーションで、外国ルーツの生徒が母国文化を紹介し、日本人生徒の異文化理解につなげた。

● 左記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

講義では、文化は学習され共有されるものであり、人は複数の文化をもつことから、「異文化＝外国の文化」ではないと学んだ。また、歴史観や言葉が変化するように文化も固定的ではないことを理解した。さらに、ユネスコ勧告が示す「Global Citizenship」「Conviviality」「Empowerment」「Dialogue」が、これからの教育の基盤となる価値であることも学んだ。

矢野デイビット氏の講演からは、家庭・人種・言語の三つの壁を抱える子どもには、平等よりも寄り添い、自尊心を育てる支援が必要であると気付いた。当事者の声を聴くことの重要性も強く実感した。

さらに、理想の学校づくりのグループワークでは、多様な文化が共にある環境では、違いを理解し、対話によってルールを共創することが不可欠であると感じた。そして、対話こそが文化を更新し、多文化共生を実現する鍵だと確信した。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

(1) 対話できる文化

多文化共生とは、異文化の相手に干渉しないことではなく、違いを前提に互いが快適に暮らすための価値観やルールを共有していく営みである。そのためには、問題が起こったときだけ対応するのではなく、日頃から対話によって互いを理解し合う姿勢が不可欠である。

(2) 多様性が受け入れられる文化

多様性が受け入れられる文化があれば、新しく加わる生徒も安心して学校生活に適應できる。また、受け入れる側にとっても相手を理解する機会が増え、トラブルの予防にもつながる。

(3) 相手を尊重できる文化

自分がマジョリティの立場にあるときこそ、相手の文化を尊重できるかが問われる。生徒たちは将来、より複雑な多文化社会で様々な大人と協働することになる。相手を尊重する姿勢は重要な対人関係能力となる。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

(1) 対話できる文化

多文化共生を進めるうえで、マジョリティはマイノリティの声に耳を傾け、彼らが何に困り、何を望んでいるのかを理解する必要がある。反論するためではなく、相手の事情を丁寧に把握し、混乱の少ない方法を共に探る対話こそが、互いの幸福につながると考える。

(2) 多様性が受け入れられる文化

①言葉のバリア

言語の壁は個人差が大きいため、授業ではやさしい日本語や ICT や生成 AI を活用し、その対応を進めたい。例えば、日本に来たばかりの中国ルーツの生徒は日本語キーボードの入力が難しいが、スマホを中国語設定にすれば負担が軽減される。こうした個々の状況に応じた柔軟な対応を実践していきたい。

②人種や民族のバリア

これまでの勤務校で、英会話の授業のとき、よく ALT が外国ルーツの生徒に積極的に声をかける場面を見てきた。一方、日本人生徒はクラスメイトのルーツに踏み込まず、距離を置くことが多いと感じる。外国ルーツの生徒にとって国籍の違いが「個性の一つ」であり、引け目を感じない環境を整えるためには、日本人生徒への働きかけも必要である。困っている相手を“助ける”視点ではなく、他県出身者と話す感覚でつながれるような対話活動を行い、多文化が当たり前のクラスを目指したい。

③その他マイノリティのバリア

心身の不調や複雑な家庭環境など、外国ルーツでなくても困難を抱える生徒は多い。担任以外ともつながれる第三の場所が必要である。そのため多文化共生の授業に、校内専門家（SSW・臨床心理士など）やマイノリティ当事者を含む外部機関の方をゲストとして招き、支援の実際を学べる機会をつくりたい。社会に“味方”がいると知ることが、生徒の気づきや行動を促す力になると考える。

(3) 相手を尊重できる文化

研修で学んだ、文化に優劣をつけないで理解するという文化相対主義の視点は、生徒にも不可欠である。オンラインで東ティモールと交流した際、互いが幸せになるための方策を考える場面で、私たち日本側が無意識に他文化を下に見て、助ける側の視点で考えていたことに気づかされた。東ティモールの人々はすでに幸せそうで、日本がそこから学ぶべきだという協力隊の言葉を聴き、その無意識のバイアスを反省した。多様な文化を「問題」ではなく「魅力」として受け止められるように、交流の機会を増やし、相手の文化を尊重する姿勢を育てたい。



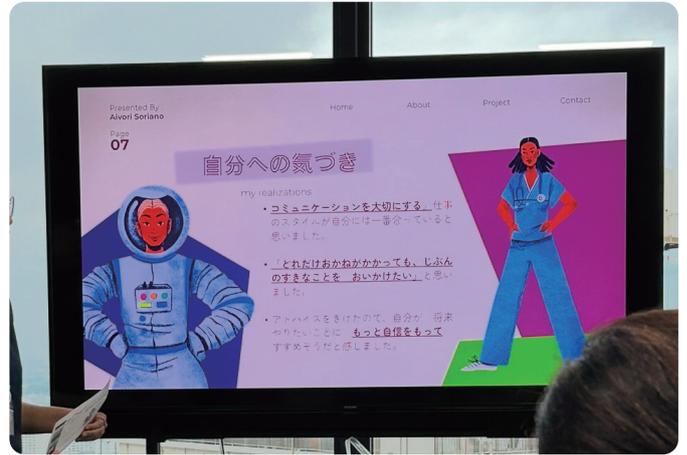
(写真1) オンライン出前講座によるタイとの国際交流



(写真2) やさしい日本語出前講座 (吉開章先生)



(写真3) やさしい日本語出前講座 (井上くみ子先生)



(写真4) カタリバ職業体験発表会

外部機関との連携

JICA	やさしい日本語を実際に使い、互いがより幸せになるには何が必要かを探究する機会として、オンライン出前講座を利用している。(写真1)
一般社団法人やさしい日本語普及連絡会	やさしい日本語の教え方に迷い、講座を依頼した。やさしい日本語だけでなく、困っている人を助けたいという優しい心を教わった。(写真2、3)
多文化・多世代の学びの場あそび舎てんきりん	自分自身の学びのために、イベントに参加したり、相談に乗ってもらったりしている。
認定NPO法人カタリバRootsプロジェクト	課外活動として、外国にルーツのある生徒がカタリバのキャリア対話プログラム「Roots インターン」に参加。また、探究の授業づくりに役立つ教材を共有していただいた。(写真4)

キャンパスを出て地域の現実に触れる —多国籍タウン・新大久保を歩いて—

米山 周作 | 学習院高等科

全校児童 / 生徒数 約600名

学校背景

親が外国ルーツの生徒は一定数いるが、その人数や国籍のデータは特に取っていない。都心にある私学なので、生徒は東京・神奈川・千葉・埼玉と首都圏全域から通っている。近隣には池袋、高田馬場、新大久保といった多国籍タウンがあり、キャンパス周辺のコンビニや飲食店の従業員はほぼ外国人である。

研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって
「多文化共生の文化」が必要なのか



自分にとって

自分自身が一つの環境に長く留まっているため、自身の視野も無意識のうちに偏狭になっていないかという危機感がある。自身も Comfort Zone を出て、新たな視点を得ないと、生徒達にも伝えられない。



学校にとって

教室の中だけでの学びには限界がある。キャンパスを出て、生徒達を取り巻くリアルな多国籍・多文化社会の実情を五感で感じさせることが重要。机上の知識以上の体感がないと、個々の行動にはつながっていかない。



世界・社会にとって

昨今、多くの国が自国ファーストに傾いていく一方で、世界が連帯しないと地球・人類は存続できないという現実もある。自文化を大切にしつつ、異文化を尊重する価値観が広く共有されなければ、大きな悲劇となる。


 現在の課題

上述の通り、生徒は首都圏全域から通ってきており、学校と地域との関係性は薄い。キャンパス周辺には多くの外国人が在住・在勤していながらも、コンビニで買い物をしたり、飲食店で料理を注文したりする以上に言葉を交わす機会は皆無である（最近ではセルフレジやタブレット注文が主流になっているため、こうした僅かな接触すら減っている）。都心の学校としての立地を活かし、近隣の多国籍性を通して多文化共生について学ぶ機会を提供できないだろうか。そうした歯痒い気持ちを抱えていた。


 現在の取り組み

学校として海外との「国際交流」には熱心に取り組んでいるが、身近な「地域交流」にはもっとできることがあると思っている。

個人的には、「総合的な探究の時間」の一講座として「国際協力入門」という選択科目を開講しており、15名程度の少人数で、毎週2時間、SDGsに関する授業を実践している。国内の移民・難民問題を扱った動画や新聞記事を教材にしたり、モスクを訪問して在日ムスリムとの交流を図ったりしているが、昨今の情勢を踏まえ、より一層踏み込んだ取り組みの必要性を感じている。

● 左記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

「子どもは人を魂で見る」。矢野デイビッド氏のこの言葉を大変重く受けとめる。

自分自身も子ども時代をインターナショナルスクールで過ごし、仲の良い外国人も仲の悪い日本人もいたことをよく覚えている。子どもは人を人種や国籍ではなく、その内面で判断し、付き合いしていく。それが成長と共に変わってってしまうのだとしたら、それは子どもを取り巻く我々（大人・学校・社会）の責任であり、修正していくのも我々の責任と言えよう。

学校という小社会で起こる異文化衝突であれば、教師というファシリテーターが、両者の対話の質を上げる役割を担うことになる。AIではなく、体温のある人間の教師が、生徒達の心に触れながら実践してこそ質は上がる。教師一人一人が意識を高く持ち、時間を掛けて、幼稚園～大学・市民社会と、絶え間なく多文化共生意識を育む環境が維持されていくことが大切である。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

多様性を受け入れることで、新たな価値観に気づき、自身の視野が広がり、人生は豊かになる。「違うことは当たり前」「違いは新たな喜び・楽しみを与えてくれる」「同質性は偏狭」といった価値観が日本でも根付けばいいと思う一方で、何でもありではない、従うべき・合わせるべきところはある、といった確固たる姿勢も必要。文化相対主義は大切だが、日本人が共有する一定の規律が保たれなければ、日本の生活文化も社会秩序も保たれず、双方の幸福はない。「日本人が共有する一定の規律」そのものを問い直しながら、双方の対話を通して得られる「成熟した」多文化共生観を見出していきたい。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

筆者の担当する「国際協力入門」（毎週火曜日 5・6 限 / 通年 / 少人数）において、次の取り組みを 1 ヶ月程度掛けて行う。

① 問題意識を持つ：

TV ドキュメンタリー *1、新聞記事 *2、文献 *3 などを通して多文化共生について問題意識を高める。また日本屈指の多国籍タウン・新大久保の多国籍・多文化性を概観する。

② 実態に触れる：

新大久保を実際に歩いてみる。店、看板、通り、行き交う人々、聞こえてくる音などに注意を払い、可能な範囲で写真を撮ったり、当事者達の生の声を拾ったりしてみる *4。

③ 現場の声を聞く：

外国人の窓口となっている行政機関の担当者、新大久保在住または在勤の外国ルーツの方など、当事者に直接話を聞く *5。

④ 振り返る：

意見交換を行い、一人一人の学びを共有する。また引き続き、多国籍料理店、横浜中華街、埼玉県川口市など外国ルーツの人々が多く集まる場所に関心を持ち続けるように促していく。

*1 【TV ドキュメンタリー例】

- ・ 2022.2. 1. NHK BS1 スペシャル「新大久保 明日を探す多国籍タウン」
- ・ 2025.11.11. NHK クローズアップ現代「広がる“外国人不安”その陰で何が・・・」

*2 【新聞記事例】

- ・ 2025.9.14. 読売新聞「共生社会 次世代教育で実現」（小波津ホセ）
- ・ 2025.9.28. 読売新聞「外国人受け入れ」（大竹文雄）

*3 【文献例】

- ・ 室橋 裕和（2020）ルポ新大久保 移民最前線都市を歩く（辰巳出版）
- ・ 室橋 裕和（2019）日本の異国 - 在日外国人の知られざる日常（晶文社）

*4 10 数名の高校生がぞろぞろと歩き回るのは好ましくないので、いつまでにと期限を設け、小グループを作り授業時間外でそれぞれ実施することを想定している。また実際には、写真を撮ったり、仕事中の外国人に話を聞いたりすることはかなり難しく、大きなトラブルにも発展し得るので、決して無理はさせず、事前にかなり入念に注意事項を伝えておくことが重要である。

*5 外部機関・団体との連携は必須である。特に新大久保で働く方々に時間を作っていただくことは至難の業であると考えるので、仲介役となって下さる方の存在、協力者との信頼関係の構築、協力者にとってもメリットとなるような仕組み作りなどが必要である。

このたびの実践研究にあたって、早稲田大学文学学術院・箕曲在弘教授に大変有益なご助言・ご提案をいただいた。この場を借りて謝意を表したい。

参考文献：

- ・ 箕曲 存弘（2022）新大久保に生きる人びとの生活史（明石書店）
 - ・ 一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）（2023）
- 誰もが自分を発揮できる学校づくり～多文化共生アイデア Book 2022～ p.62-73
（独立行政法人 国際協力機構（JICA）広報部 地球ひろば推進課）

〈しんじゅく多文化共生プラザの掲示資料〉

新宿区における外国人住民の人口 (令和7年10月1日現在)

●住民基本台帳の人口 (人)

		男	女	合計
住民基本台帳		178,818	177,163	355,981
内訳	日本人	152,421	152,403	304,824
	外国人	26,397	24,760	51,157

※外国人の人口は51,157人で、住民の約14%が外国人です。

●年齢区分別人口 (人)

		年少人口 (15歳未満)	生産年齢人口 (15歳～64歳)	老年人口 (65歳以上)
住民基本台帳		29,387 (8.3%)	259,979 (73.0%)	66,615 (18.7%)
内訳	日本人	26,507 (8.7%)	213,756 (70.1%)	64,561 (21.2%)
	外国人	2,880 (5.6%)	46,223 (90.4%)	2,054 (4.0%)

新宿区における外国人住民の人口
(住民基本台帳・年齢区分別)

新宿区における外国人住民の人口

●国籍別の人口 (令和7年10月1日現在)

新宿区では、135ヵ国の国や地域の方が住民登録をしています。
人口の多い上位10ヵ国を紹介します。

国名	人数	%
1 中国	19,735	38.6%
2 韓国	9,170	17.9%
3 ネパール	5,437	10.6%
4 ミャンマー	3,371	6.6%
5 ベトナム	2,651	5.2%
6 台湾	1,999	3.9%
7 米国	1,224	2.4%
8 フランス	791	1.5%
9 フィリピン	703	1.4%
10 バングラデシュ	701	1.4%
ー その他	5,375	10.5%

新宿区における外国人住民の人口
(住民基本台帳・年齢区分別)

外国人住民の多い地域 (令和7年10月1日現在)

●外国人住民の多い地域 ※区全体では、人口の約14%が外国人です。
特に、大久保1丁目・百人町1丁目・百人町2丁目は、いずれも外国人人口の割合が40%を超えています。

外国人住民の多い地域

多文化共生の取組み

日本語学習への支援

- 日本語教室 (10教室)
- 日本語ひろば (多文化共生プラザ)
- 子ども日本語教室
- 日本語ボランティアの育成支援
- 小中学校での日本語サポート指導

多言語による情報提供

- 新宿生活スタートブック
- 新宿生活スタートガイド
- 生活情報紙 ・ 外国語版広報紙
- 外国語版新宿区ホームページ
- SNS (4種)

多言語による生活相談

- 区役所本庁舎1階
英語、中国語、韓国語
- しんじゅく多文化共生プラザ
英語、中国語、韓国語、タイ語

参加・交流

- 多文化共生まちづくり会議
- 多文化共生連絡会
- 外国の文化を紹介する
イベントや交流会の開催
- 交流地点 (しんじゅく多文化共生プラザ)

多文化共生の取組み

〈新大久保の街の様子〉



多国籍タウンの中心・JR 新大久保駅



駅周辺でゴミ拾いを行う商店街スタッフ

外部機関との連携

しんじゅく多文化共生プラザ	外国人と日本人の交流の拠点として、生活に必要な情報を多言語で提供したり、日本語教室を開講したりしている。
新宿区立大久保図書館	地域の図書館として、多文化共生を推進するために様々な取り組みを行っている。
新大久保商店街振興組合	あらゆる業種の企業などが加盟しており、地域振興のための各種イベントなども企画している。

多文化共生に力点を置いたグローバルフラグシップ 高専の創出

荒川 裕紀 | 独立行政法人国立高等専門学校機構
明石工業高等専門学校

全校児童 / 生徒数 895名

学校背景

本校は多文化都市・神戸に近く、外国にルーツをもつ学生が約3%、留学生は5～6%。全国から学生が集まり、約250名が寮生活をしている。寮生の1割と教員の1割が外国籍で、国際学校出身者や国費留学生も在籍。「グローバル高専」として留学経験者も多く、国際的な学びの機会が豊富である。



研修からの学び・気づき

なぜ今、自分 / 学校 / 世界・社会にとって
「多文化共生の文化」が必要なのか



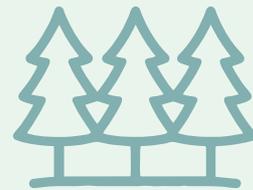
自分にとって

● 私の専門は文化人類学であり、「グローバルスタディーズ」を通じて多文化理解を深めている。真の多文化共生の実現は、教育者としての使命であり、私のライフワークでもある。



学校にとって

● 本校は「グローバルフラグシップ高専」として国際的な取り組みを展開している。専門科目の習得に加え、異文化の仲間と共に生き、創造する意義を共有できる環境づくりが重要である。



世界・社会にとって

● 世界各地で多文化共生を巡る対立が顕在化し、日本でも喫緊の課題となっている。日本の教育現場で応答可能なモデルを提示・実践することは、今後の課題解決に資する意義深い挑戦である。



現在の課題

4年前に「国際寮」を新設し、現在、多くの留学生がこの寮で生活しており、日本人学生と共に「共住」している。しかし、留学生同士が出身国ごとに集まりやすく、交流が限定的になる傾向がある。この改善のため、各フロアに留学生を分散配置し、日本人学生との共生を促す仕組みも導入したが、文化や言語の違いによる「見えない壁」が依然として存在。より深く個人的に交流できるような仕組みづくりを目指しているが、効果が出ていない取り組みもある。



現在の取り組み

本校では、留学生支援と国際交流の促進に力を入れており、①留学生にチューターを配置し学習・生活面をサポート、②交流団体を通じて学生間のつながりを育成、③「グローバルスタディーズ」関連科目を開講し国際理解を深めている。④短期留学生は各クラスに分散配置され、⑤語学留学に限らず韓国・台湾・フィリピン・カンボジアなどへのスタディツアーも展開。⑥寮生会役員に留学生が就任し、⑦長期個人留学への働きかけと経済的支援も行っている。

● 左記の考えに至った理由・本研修における学びや気づき

全国の教育関係者が集い、現場の課題を共有したことは、日本社会の教育的・社会的問題を俯瞰する上で有意義であった。特に工業地帯では、多様な文化的背景をもつ人々の移入が進み、教育現場では言語や文化の壁に直面する教員が多い。こうした状況を踏まえ、本校が育成すべき「世界」とは、海外に限らず日本国内にも広がる多文化的環境である。将来の工業発展は異文化との協働と共生を前提とし、日本社会の持続可能性にも関わる課題である。ゆえに、学生が早期から多文化共生の意義に向き合い、摩擦や理解困難に対処する力を育むことが不可欠である。共生の実践者として新たな価値を創出できる人材の育成こそが、本校の使命であり、社会的責任である。本校の教育は国際化を超え、社会変革の一端を担うものであり、日本の教育モデルの先駆的事例となる価値を有していると確信する。

自分が創りたい「多文化共生の文化」とは？

多様性を尊重しながらも、社会全体が共有する目標に向かって協働できる文化基盤を築くことは、持続可能な共生社会の構築に不可欠である。各人が自身のルーツやアイデンティティを大切にしつつ、社会的課題に対しては責任を持って関わり、一定の規範のもとで共に生きる姿勢が求められる。こうした規範は、強制ではなく社会的目標の共有によって自発的に形成されるべきものである。最も懸念すべきは、規範なき混住、すなわちアノミーの状態であり、それは共生の基盤を脅かす。だからこそ、初等教育から「規範のある共生」の順序を丁寧に伝え、他者との違いを尊重しながらも社会の一員としての責任を果たす意識を育むことが、公教育の重要な使命である。私はその理念のもと、多文化共生社会の実現に向けて教育実践を重ねていきたいと考えている。



学びや気づきを踏まえた取り組み・アイデア

多文化共生に重点を置いたグローバルフラグシップ高専の創出に向けては、現在本校で展開されている諸施策を体系的に再評価し、その高度化および新規展開の可能性を戦略的に検討する必要がある。これまでの取り組みは、留学生支援、国際交流、スタディツアー、関連科目の開講等を通じて一定の成果を挙げてきたが、今後はそれらを制度的・全学的な枠組みへと昇華させ、教育効果の持続性と社会的波及力を高めることが求められる。

① 留学生に対するチューター配置による学習・生活支援・② 交流団体を通じた学生間の関係構築

限定的な学生による活動と認識されがちであり、学校全体の取り組みとしての認知が十分ではない。今後は複数名によるチューター制度の導入や、短期留学生との交流を担う校内国際交流サークル（Student Ambassador）の拡大化の統合、高学年留学生による新入生支援など、教育的関与の拡大が望まれる。

③「グローバルスタディーズ」関連科目

講義・ゼミ形式に加え、国内の多文化共生地域へのミニスタディツアーや⑤との連動を通じて、実践的活動による身体的理解を促す教育形態への転換が求められる。

④ 短期留学生の各クラスへの分散配置

低学年への重点的配置と教員との連携強化により、講義・実習内での交流を促進する教育設計が重要である。交流イベントを全学的な取り組みとして位置付ける必要がある。

⑤ 語学留学に限らない、韓国・台湾・フィリピン・カンボジア等へのスタディツアー

現地課題への協働的解決を含む実践型プログラムとして展開されており、今後は外国人労働者流入地域での課題解決型学習を通じて、国際理解と責任感の育成を図る。

⑥ 寮生会への留学生の参画

留学生を構成員として位置付けることで共生の常態化を促進する。周辺の民族・国際学校との連携強化と広報により、入学者の多様化と教育の深化が期待される。

⑦ 長期個人留学

留学を推進する国際交流組織である YFU・AFS との連携により、学生が Grass Root Ambassador として国際交流を体験している。今後は経済的支援の充実により、参加機会の拡大が必要である。

加えて、JICA との連携による JOCV 派遣制度の単位化は、国際協力の意義を若年層に体験的に理解させる有効な手段であり、本校の使命に合致する。



韓国スタディツアーを機に人的交流が継続し、韓国の学生が本校を訪問



学生交流を軸に韓国スタディツアーを実施、長期留学促進に貢献



フィリピンスタディツアーにて日比学生が現地大学のボランティア活動に協働し、多文化共生を実践



Minami ども教室に留学生も加わり、国内の多文化共生プロジェクトに継続的に参画

外部機関との連携

JICA	専攻科でJOCV派遣を制度化し、国際志向の学生育成を体系的に支援する構想を提案する。
兵庫県国際交流協会	広報やイベントを通じて県内認知を高め、地域と連携する国際教育拠点を担う。
Minami ども教室	単発的な交流を単位化・サークル化し、継続的な共生実践の場へ発展させる。
公益財団法人 YFU 日本国際交流財団	長期留学の派遣・受入を推進し、草の根大使の育成と多文化共生意識の醸成を図る。
公益財団法人 AFS 日本協会	低学年段階での長期留学の派遣・受入を推進し、初期段階から国際意識を涵養する。

2025 年度 JICA 教員研修 「多文化共生の文化」 共創プログラムレポート

「多文化共生の文化をつくるために、私たちにできることは何だろうか？」そんな問いを胸に、全国から 16 名の先生方が JICA 市ヶ谷に集まり、3 日間の研修が行われました。

研修では、講義やワークショップ、たくさんの対話を重ねながら、お互いの違いを尊重し合い、共に学び合える学校や学級、文化をどのようにつくっていくかについて、じっくり向き合いました。このプロセスで、大切にしたのは 3 つの問いです。

この 3 つ問いを柱に、参加者の皆さんは、それぞれの現場を思い浮かべながら、たくさんのアイデアを形にしていきました。一人一人の先生が、自分の学校や地域でできることを考え、仲間と共有する中で、「多文化共生の文化」が少しずつ、しかし確実に広がっていく、温かな手応えを感じる 3 日間となりました。

WHY

なぜ、今、
「多文化共生の文化」が
必要とされているのか？

WHAT

私たちが共創したい
多文化共生の文化
とは何か？

HOW

多文化共生の文化を
共創するために
やってみたいこととは何か？
(アイデア・アクション)



第 1 回研修 | 1 日目 10 月 4 日 (土)

● 対話 「なぜ、今、多文化共生の文化が必要とされているのか」

自分・学校・世界（社会）のそれぞれの視点から、「なぜ今、多文化共生の文化が必要とされているのか」について考え、小グループで意見を共有しました。さらに、対話を通して得られた気づきや感想を全体でも共有しました。

「自分の“当たり前”が他の人にとっての“当たり前”ではないことに気付いた」、「物事を相対的

に見ることの大切さを実感した」といった声がありました。また、特別支援の生徒や日本語の理解が難しい人たちのために行われている日本語教室などについての話を聞いて、「ユニバーサルデザインの一つとして多文化共生の考え方があったらいいと思う」という意見も出されました。



●「多文化共生の文化」の共創につながる各自の取り組みと課題の共有



事前に作成したスライドをもとに、所属先の多文化共生に関する現状や課題について、自分の考えを整理しグループで共有しました。仲間と話す中で、自分の抱えていたモヤモヤや考え方の違いに気付いたり、仲間と意見を交換することでその気持ちが少し解消される様子もありました。

また、勤務校での取り組みやワークシートの活用例の紹介を通じて、実践のイメージをより具体的に持つことができ、「自分たちの学校でも取り入れてみたい」と前向きに考えるきっかけになり、さらに「こうしたらより良くなる」という改善アイデアも出し合うことができた参加者もいました。

● JICA 地球ひろば見学・多文化共生ワークショップ

JICA 地球ひろばは、「市民参加による国際協力の拠点」として2006年4月に設立されました。ここでは、開発途上国の暮らしの現状や、地球が抱える課題、国際協力の実情などを、見て・聞いて・さわって体験できる展示と、途上国での活動体験談や開発教育教材を使った参加型学習（ワークショップ）を組み合わせたプログラムを実施しています。



今回の研修では、多文化共生社会企画展「知らない私に会う If I Were You / If You Were Me」の見学と、JICA 地球ひろば案内デスク総括主任・佐藤秀樹氏によるワークショップを一連の流れで体験しました。展示や体験コーナーには、誰もが気軽に異文化に触れ、多文化共生について考えられる工夫が随所であり、教材づくりや実践に生かせる多くのヒントを得ることができました。



その後のワークショップでは、展示での気づきを踏まえながら明確な焦点をもって対話を深めることができ、学校現場で活用できそうな具体的なアイデアが豊富に得られました。さらに、展示の企画者から直接、学びの提供者としての考え方や熱意を聞くことができ、参加者にとって大きな刺激となりました。

● 新宿区立愛日小学校訪問

JICA市ヶ谷から徒歩圏内にあり、145年の歴史をもつ公立小学校として、多文化共生や地域とのつながりを生かした教育実践に取り組む新宿区立愛日小学校を訪問しました。まず、ベトナムの日本人学校での教職経験をもつ福成俊之副校長先生からお話を伺い、国際的な視点と地域教育が結びつく「持続可能な国際理解教育」について理解を深めました。校内見学では、地域住民が放課後の活動に関わる様子も見られ、学校が地域と共に育つ場であることを実感しました。



福成先生のお話と学校見学を通して参加者は、新しいことを追い求めるだけでなく、既存の取り組みに工夫を加えて発展させる姿勢や、身近な資源を積極的に活用する発想の重要性に気づかされました。また、海外経験など、教師の特別な体験を“特別なまま”にせず、日々の授業や教育活動へ自然に溶かし込むためには、教師自身が研修を通じて学び続けることが必要であるとの印象的な言葉も聞かれました。訪問は、今後の実践に生かせる多くの示唆を与える貴重な機会となりました。

第1回研修 | 2日目 10月5日(日)

● 講演（公開セミナー）：「お互いの『違い』の意味をゆっくり紡いでみる」

講師：矢野 デイビット氏

（ミュージシャン、ナレーター、司会、一般社団法人 Enije 代表、明星大学客員講師）

講師の矢野氏は、日本人の父とガーナ人の母のもとガーナで生まれ、6歳で来日。文化の違いから家族と離れ、18歳まで児童養護施設で育った経験をお持ちです。25歳でガーナのストリートチルドレンと出会ったことを契機に、自立支援団体 Enije を設立。学校建設や教育支援を通じて、ガーナの子どもたちを支える活動を続けています。

講演では、ご自身の生い立ちから現在に至るまでのライフストーリーを丁寧に語っていただき、参加者はその深い経験や心に響くエピソードに触れ、「平等」や「公平」といった多様性の尊重について考える貴重な機会となりました。特に、教育現場における多様な背景をもつ子どもたちとの接し方や関わり方について、時間をかけて丁寧に向き合うことの大切さをあらためて感じる事が





でき、あらたな学びと気づきを得る場となりました。参加者の中には、その語りを通して外国につながる児童生徒が抱える困難を「追体験するような感覚」を覚えた人もいました。また、矢野氏が幼少期に感じた孤独や葛藤、そこに寄り添い支えてくれた日本人の存在について「おかげで今の自分がある」と語る姿に胸を打たれたという感想も寄せられました。矢野氏の一言一言には当事者としての重みがあり、「寄り添う心」「受け止める姿勢」の大切さ、そして教育における多文化共生が単なる知識の習得ではなく、人としての“あり方”を育てる営みであることや、知らないことを知るだけでなく、背景の異なる人々にどう向き合うかを問い直す機会にもなりました。

講演後の研修参加者との対話では、矢野氏が「子どもたちは日本の未来とよく言われます。しかし、人を育てる先生方こそが未来そのものです」との力強いメッセージがあり、参加者は大きな勇気と励ましを受けました。

● ワークショップ:このメンバーで、未来に向けて共創したい「多文化共生の文化」とは？

ここまでのお話や見学、講演、対話などを踏まえ、「このメンバーで、未来に向けて共創したい「多文化共生の文化」とは？」というテーマで、全員でキーワードを出し合いました。

キーワードを出してみても、「共に新しい価値を生み出す想像力が大事だ」や「他者の文化を知ること、自分自身の新たな一面にも気づける」というコメントがありました。一方で、「忙しい日常の中では思いや議論が埋もれやすく、変化には真剣に考える『場と時間』が必要だ」や「良い言葉が多く出たが、具体的に何をするのかのイメージがまだ少しつかみにくい気がする」との率直な感想もありました。一人一人の想いと気づきが重なり、まさにこの場から「多文化共生の文化」の芽が育ち、未来へ向けた確かな一歩となる時間でした。





● 対話：「多文化共生の文化」がある学校とは？

参加者は、学校種ごとのグループに分かれ、「多文化共生の文化」がある学校とはどのような学校かについて意見やアイデアを自由に出し合い、そのイメージを広げていきました。対話を通して、多文化共生の意義や必要性を幅広い視点で考えることができ、理想の学校づくりについて話し合う中で、同じ校種ならではの新たな気づきやアイデアも生まれました。さらに、各グループで出たアイデアを全体で共有することで、学校種による課題も見え、校種間の連携の重要性を実感する充実した時間となりました。

● ～対話から生まれた「多文化共生の文化」がある学校の概念・イメージ～

小学校教員グループ | 菊地・石田・中村

「多様な人・文化・考え方と出会い、学び、協働できる場」であり、学びの内容（ソフト）、学校の制度や環境（ハード）、両者をつなぐ柔軟な仕組みが整った学校。子どもも教員も、そして地域も、多様性を尊重しながら成長できる学校。

ソフト面（教育内容や学びのあり方）

- ・ 教科に関すること：幅広いテーマを柔軟に学び、多文化や多様な価値観に触れられる学びがある。
- ・ 教科外の学び：学校外の人・場所とつながる体験をすることで多様な価値観を学ぶ機会がある。

ハード面（制度・施設・組織体制）

- ・ 外部協定・連携：多様な主体と連携し、多文化的な学校運営を支える仕組みがある。
- ・ 施設・システム：多様な学び方や働き方を実現するための環境と設備がある。
- ・ 教員に関すること：教員が働きやすく成長できる、休暇・裁量・働き方・研究環境が総合的に充実している。

ソフトとハードの中間

- ・ 制度や環境と、教育内容の双方をつなぐ役割を果たす。



小学校教員グループ | 仲尾・勝田・田淵・阿部

衣食住・学習環境・保護者連携・心技体の学びのすべてにおいて、「違いを自然に認め合い、安心して自分らしくいられる場」をつくる学校。

衣食住・学習環境の工夫

- ・ 服装や食事など、文化の違いを自然に楽しめる環境をつくる。
- ・ 宗教体験や机のホワイトボード化など、日常の中で多文化に触れる仕掛けを設ける。

保護者との連携

- ・ 多言語の連絡手段で保護者と学校をつなぐ。
- ・ 授業参加など、保護者も学校の多文化活動に関わる機会をつくる。

心技体の育成

- ・ 自分らしさを大切に、心のケアやゆとりのある時間で安心して過ごせる環境を整える。
- ・ 多言語の遊びや世界の文化紹介を通して、多様なスキルと特技を認め合う。

留意点・懸念点への対応

- ・ 自己開示が苦手な児童には、母語を活かした表現活動や日常的な多文化環境でサポートする。
- ・ 多文化教育が一過性で終わらないよう、毎日の学校生活に継続的に組み込む。



中学校教員グループ | 河村・野口・川村・小川

生徒と教員の多様な背景を尊重した、基礎学力と探究・対話の力を成長させられる学びの場。

多様性の尊重と包括的なアプローチ・教育体制

- ・ 外国籍や多文化背景をもつ生徒・教員だけでなく、性別・宗派・特別支援など、多様な個性や背景をもつ人々も受け入れていく。
- ・ 教員や管理職も多様性をもつことで、多文化理解を学校全体で促進する。

学びの柔軟性と探究・対話の時間の確保

- ・ 高校・大学入試制度が変わることで、小学校での学びや知識を活かした、探究、対話の時間が確保される

学校と家庭・地域の連携

- ・ 多様な授業外アクティビティの実現
- ・ ユニバーサルデザインの文書、デジタルツールでの情報共有
- ・ 流動的なクラスや活動（例：漂流教室）による交流の機会



高等学校・高等専門学校教員グループ | 高木・吉田・塚越・米山・荒川

シンガポールの国づくりをモデルに多文化共生モデル校を考えた。この学校は、多様性の確保・自律生活・リーダー育成・制度支援の4つの柱で構成され、意図的な生徒構成と環境づくりによって、多文化理解と協働力を育む場の提案である。

多様性の確保

- ・ 生徒の入学に際して、収入・地域・民族・宗教の比率を意図的に設定
- ・ マジョリティが偏らないよう、バランスを意識した構成

自律・共同生活の推進

- ・ 全寮制で自炊・自治を通じた生活スキルの育成
- ・ 問題解決力やマインドセットの養成
- ・ 教育目標とリーダー育成
- ・ 次世代のリーダー育成（大学進学・官僚・社会リーダー）を明確に設定
- ・ 海外留学を必須化し、視野を広げる

制度・環境の整備

- ・ 国や学校が予算を確保し、無償化や長期実施で支援
- ・ 教員育成やモデル校としての長期的な実践



● 対話：自分の勤務する学校で多文化共生の文化を創るために、どんなことができるか？

参加者は個人としての思いとアクションに向き合うために、「自身がつくりたい多文化共生の文化」「今までやってきた取り組み」「これから取り組みたいこと・アイデア」をワークシートに記入し、考えを整理しました。それら書き出したものをグループのメンバーに見せ合いながら、「自身の勤務する学校で多文化共生の文化を創るために、どんなことができるか」について対話を重ねました。

仲間との意見交換やアイデア共有を通して新たな視点や助言を得ることができたことや、同じ思いをもつ仲間との対話そのものが大きな刺激となり、実践への意欲が一層高まりました。



第2回研修 10月25日(土)

● 「学校に多文化共生の文化をつくるための取り組みアイデア」の共有・ブラッシュアップ

第1回研修でのインプットや対話を踏まえ、参加者は今後所属先で取り組みたいことやアイデアを事前に考え、シートに記入して準備しました。研修では、それをもとにグループで一人ずつ共有し、他の参加者からのコメントやフィードバックを受けながら、アイデアをさらに充実させました。

また、アイデアを具体化したり、相談したいテーマごとにグループを作って話し合う時間も設けられました。「1年後の実践共有」「展示の工夫」「教科科目での実践」「JICAとの連携」「学外での学びの場」など、多様なテーマで活発な意見交換が行われ、全体共有の際には他の参加者からの新たな視点やアドバイスも加わり、対話がさらに深まりました。

3日間の研修を通じ、参加者は「多文化共生」の多様な捉え方や現場の実情を学ぶと共に、互いの考えを共有して新たな視点や気づきを得ることができました。プログラム随所に設けられた対話の時間により、単なる会話ではなく、互いを認め尊重し背景に思いを馳せる真の「対話」の価値を体感し、こうした対話こそが、「多文化共生の文化」を育む基盤であるとの理解を深める機会となりました。



プログラム参加者

都道府県	所属	氏名	職名・担当業務
小学校			
栃木県	栃木市立栃木中央小学校	仲尾 望	教諭 にほんご教室主任
愛知県	西尾市立花ノ木小学校	勝田 みゆき	教諭 日本語教育主任・保健主事
静岡県	浜松市立船越小学校	菊地 優子	教諭 第6学年主任・学級担任
広島県	AIC 国際学院広島初等部	石田 博彰	副校長
広島県	熊野町立熊野第四小学校	中村 祐哉	教諭 第5学年主任・学級担任
福岡県	北九州市立筒井小学校	田淵 陽平	教諭 第3学年学級担任
沖縄県	宜野湾市立長田小学校	阿部 サクラ アレクサンドラ 愛美	教諭 日本語指導
中学校			
愛知県	豊明市立豊明中学校	河村 知里	教諭 第3学年担任・英語科 国際理解教育・現職教育
愛知県	名古屋市立志段味中学校	野口 哲平	教諭 第2学年副担任・社会科・校務
京都府	京都市立洛友中学校	川村 昌広	教諭 夜間部・理科
福岡県	北九州市立門司中学校	小川 亮	教諭 特別支援教育コーディネーター 自閉症・情緒特別支援学級担任
高等学校			
北海道	市立札幌藻岩高等学校	高木 大作	教諭 第1学年主任・保健体育・探究
北海道	北海道札幌南陵高等学校	吉田 圭佑	教諭 第2学年担任・生徒指導・保健体育科・地学協働
埼玉県	埼玉県立大宮中央高等学校 (単位制による定時制の課程)	塚越 一江	教諭 英語科
東京都	学習院高等科	米山 周作	教諭 英語・国際交流
高等専門学校			
兵庫県	独立行政法人国立高等専門学校機構 構明石工業高等専門学校	荒川 裕紀	教養学群教授 第1学年学級担任

研修主催・運営事務局

主催：

独立行政法人国際協力機構 (JICA)

広報部 地球ひろば推進課

- 川淵 貴代 (JICA 広報部長・JICA 地球ひろば 所長)
- 植田 茜 (JICA 広報部 地球ひろば推進課 課長)
- 白浜 愛唯 (JICA 広報部 地球ひろば推進課)

運営事務局：

一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト (GiFT)

- 辰野 まどか (代表理事)
- 忍 頼子 (グローバル教育プロデューサー)
- 佐藤 さとみ (グローバル教育プロデューサー)



付録 | 多文化共生のための参考文献・教材・資料リスト

※児童生徒向け

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格(税込)	出版日	関連 サイト
				ひとことレビュー			
1	エッセイ	ホワイト・フラジリティ 私たちはなぜ レイシズムに 向き合えないのか？	ロビン・ディアンジェロ	明石書店	¥2,750	2021年6月1日	
			ホワイトフラジリティとは「白人の心の脆(もろ)さ」。差別を否認することはマジョリティの特権性につながる・・・どうしたらお互いを理解できるのかを問いかけます。				
2	教育実践	多文化クラスの 授業デザイン ー外国につながる 子どものために	松尾知明	明石書店	¥2,420	2021年3月19日	
			外国につながる子どもたちへの学びの支援は何が必要か。教科をベースに学習言語と学習方略の支援へのアプローチを紹介しています。				
3	教育実践	多文化共生のための シティズンシップ教育 実践ハンドブック	多文化共生のための市 民性教育研究会編著	明石書店	¥2,200	2020年4月2日	
			日本社会の多文化共生に向けたシティズンシップ教育の実践を提案しています。「違いを認める」ことは大切だが、個人の「思いやり」だけでは解決しない。アクティブラーニングの具体的なテーマから考えます。				
4	研究書	「人種」「民族」をどう 教えるかー創られた概 念の解体を目指して	中山京子他編著	明石書店	¥2,860	2021年1月8日	
			社会的に創られた概念であるのに、実体化されて差別や偏見を生んでいる「人種」「民族」をどう教えるか。学術的見地からみた正しい認識と、これまでに日本や海外で行われた授業実践の蓄積を踏まえて、教師が教えるための小・中・高の授業プランを提案する。				
5	国際理解 教育	国際理解教育を問い直 す ー現代的課題への15の アプローチ	日本国際理解教育学会	明石書店	¥2,750	2021年4月2日	
			国際理解教育の原点を問い直す・・・国際理解教育の歴史をたどると共に、これからの国際理解教育はどうあるべきか、授業のあり方などを考えます。				
6	※ 作品集	横浜(koko) ー「外国につながる」で はひとつくりにできない 中高生の作品集	Picture This Japan (監修), 横浜インター ナショナルユースフォ トプロジェクト写真集編 集委員会(編集)	明石書店	¥1,980	2021年5月7日	
			外国につながる子どもたち(インターナショナルユース)の目線で切り取った「横浜」の写真集。見た目や言語にとらわれず、自分らしい表現がたくさんあります。とてもステキな写真集です。				
7	実践ガイ ド	Q&Aでわかる外国につ ながる子どもの就学支 援「できること」から始 める実践ガイド	小島祥美(編著)	明石書店	¥2,420	2021年3月1日	
			何から取り組めば良いのか？Q&Aでわかりやすく伝えます。				
8	実践ガイ ド	外国人児童生徒 受入れの手引 改訂版	文部科学省総合教育政 策局 男女共同参画共 生社会学習・安全課		無料 (HPからDL)	2019年3月	
			外国人児童生徒の公立学校への円滑な受入れに資することを目的として、文部科学省が作成した「外国人児童生徒受入れの手引き」です。				

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格(税込)	出版日	関連 サイト
ひとことレビュー							
9	ノンフィクション	芝園団地に住んでい ます:住民の半分が 外国人になったとき 何が起きるか	大島 隆	明石書店	¥1,760	2019年10月1日	
10	ノンフィクション	にほんでいきる	毎日新聞取材班 編	明石書店	¥1,760	2020年12月20日	
11	ノンフィクション	アンダーコロナの移民た ちー日本社会の脆弱 性があらわれた場所	鈴木 江理子	明石書店	¥2,750	2021年6月1日	
12	評論	日常生活に埋め込まれ たマイクロアグレッシ ョンー人種、ジェン ダー、性的指向:マイ ノリティに向けられる無 意識の差別	デラルド・ウイン・スー	明石書店	¥3,850	2020年12月18日	
13	エッセイ	他者の靴を履く アナーキック・エンパ シーのすすめ	ブレイディ みかこ	文芸春秋	¥1,595	2021年6月25日	
14	教材・ ※ 読み物	未来の授業 SDGs ダイバーシティ BOOK	佐藤直久監修	宣伝会議	¥1,980	2021年12月28日	
15	評論	海外ルーツの子ども支援 言葉・文化・制度を 超えて共生へ	田中宝紀	青弓社	¥2,000	2021年5月25日	
16	実践ガイ ド	学級担任のための 外国人児童指導 ハンドブック	菊池 聡	小学館	¥1,980	2021年3月16日	
17	マンガ ※	まんが アフリカ少年が 日本で育った結果	星野ルネ	毎日新聞社	¥1,100	2018年8月20日	
18	マンガ ※	まんが アフリカ少年 が日本で育った結果 ファミリー編	星野ルネ	毎日新聞社	¥1,100	2019年3月30日	

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格(税込)	出版日	関連 サイト
ひとことレビュー							
19 ※	マンガ	まんが アフリカ少年が 見つけた 世界のことわ ざ大集合 星野ルネのワンダフル・ ワールド・ワーズ!	星野ルネ	集英社	¥1,210	2020年5月26日	
			<p>単なる世界のことわざ辞典ではありません。星野ルネさんの体験を通じたことわざから、世界が広がります。 ※星野ルネさんの本は、教材として使用することができます。(申請不要)</p>				
20	ノンフィクション	外国ルーツの若者と 歩いた10年	海老原周子	公益財団法人 東京都歴史文 化財団 アーツカ ウンシル東京	無料 (HP から DL)	2021年3月15日	
			<p>本研修でもお話いただいた海老原周子さんの著書。外国ルーツの若者を取り巻く現状やワークショップの現場で見えてきた課題、次の10年に向けて取り組むべきことの提案などを、活動の記録と共に記しています。リンクからPDFがDLできます。</p>				
21	教育実践	多文化社会で多様性を 考えるワークブック	有田佳代子、志賀玲子、 渋谷実希(編著) / 新 井久容、新城直樹、山 本冴里(著)	研究社	¥2,420	2018年12月17日	
			<p>様々なバックグラウンドを持つ人々が一緒に生きる社会で、仲間と考えを伝え合いながら理解を深め、あらためて多様性を考え得るワークが掲載されています。子どもから大人までアレンジして使えます。</p>				
22 ※	教育実践	(超・多国籍学校) は今 日もにぎやか! 多文化共生って なんだろう	菊池 聡	岩波ジュニア 新書	¥902	2018年11月20日	
			<p>国際教室での取り組みを現場からお伝えします! 困難や問題を解決するヒントがたくさんあります。</p>				
23 ※	マンガ	となりの席は外国人	あらた真琴	ぶんか社	¥1,047	2012年4月2日	
			<p>もと小学校教員の作者が外国につながる子どもがたくさんいる学校に赴任した! 気軽に読めるマンガです。</p>				
24	教育実践	チャレンジ! 多文化体験 ワークブック: 国際理解 と多文化共生のために	村田晶子 / 中山京子 / 藤原孝章 / 森茂 岳雄 編	ナカニシヤ出 版	¥2,420	2019年6月30日	
			<p>授業や学生主体の交流活動、地域の国際交流活動でも使える Chapter は「問い」と「活動」で構成されています。ワークシートもついているので振り返りや報告会にも活用できます。</p>				
25 ※	エッセイ	ぼくはイエローで ホワイトで、 ちょっとブルー	ブレイディ みかこ	新潮社	¥1,485	2019年6月30日	
			<p>ここはイギリス、中学生の「ぼく」はイエローでホワイト、その中で考える多様性とは、アイデンティティって何だろう? ? 読みやすいエッセイから考えます。 成長した「ぼく」の親離れを描く「2」もあります!</p>				
26 ※	教材・ 読み物	WE HAVE A DREAM 201 カ国 202 人の夢 xSDGs	市川太一編	いろは出版	¥2,860	2021年6月12日	
			<p>世界 201 カ国の若者たちが語るそれぞれの夢。その夢がつながるところに何が見えるでしょうか。それぞれの夢がどの SDGs に関連しているかも考えます。英語版もあります。</p>				

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格 (税込)	出版日	関連 サイト
ひとことレビュー							
27 ※	写真集	Daily Bread: What Kids Eat Around the World	Gregg Segal	powerHouse Books	(\$40)	2019年6月4日	
			世界の子供たちは、何を食べているのでしょうか？セネガルやブラジル、インドネシアなど世界の子供たちと彼らが1週間で食べたものを美しい写真で紹介しています。				
28	報告書・ ワーク ショップ 集	教師国内研修報告書 & ワークショップ集 多文化共生 ～困難さを豊かさに変 えるプロセス～	—	JICA 横浜	無料 (HP から DL)		
			誰一人取り残さない持続可能な社会へ向けて、日本から海外に渡った日本人移住者の歴史や、海外から日本に戻ってきた人々の暮らしに触れることを通して、多文化共生について理解を深め、研修で得た知識や経験をもとに、「持続可能な社会」「誰一人取り残さない」をテーマとした参加型学習教材（ワークショップ）を作成しました。				
29 ※	教材・ 読み物	世界の教室から	—	JICA 東京	無料 (HP から DL)		
			世界 14 カ国の教室の様子を写真とメッセージで紹介。外国につながる生徒の背景がわかります。				
30 ※	実践ガイ ド	今日から私も バディさん	—	JICA 中部	無料 (HP から DL)		
			外国の人たちは「地域で共に生きる仲間です」バディさんは、地域で外国の方が安心して暮らすことができるように手助けをする仲間・相棒です。バディさんになるための入門書！				
31	報告書・ ワーク ショップ 集	多様な社会を考える 学びのプログラム集	—	JICA 中国	無料 (HP から DL)		
			はじめて開発教育・参加型の学習を実践しようとしている方や、多文化共生、多様な社会の構築について考えたいという方が、すぐに活用できるように作成しました。				
32 ※	雑誌	JICA 広報誌 JICA Magazine	—	JICA 広報部	無料 (HP から DL)	偶数月発行	
			偶数月に発行される JICA の広報誌です。中高生向けの記事もたくさん掲載！美しい世界の写真はスマホや PC のオリジナル壁紙として DL 可能です。電子書籍でも購読できます（無料）				
33 ※	ポッド キャスト	「世界は可能性で いっぱい」 presented by JICA Magazine	—	JICA 広報部		隔月配信	
			国際協力のゲートウェイ JICA Magazine 編集部のポッドキャスト番組です。世界各地、多種多様な職種で活動する JICA 海外協力隊員や、専門家などを毎回ゲストに迎え、生の声をお届けします。現地で見た、聞いた、食べた、感じたことを編集部員がインタビューし、世界に目を向けるきっかけとなることを目指したトーク番組。				
34 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないア フリカのこと」 アフリカ篇 (アフリカ全体)	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
			主に中学生を対象とした開発教育用の教材です。知っているようで知らないアフリカのこと、アフリカ全体とアフリカの 10 カ国について紹介しています。生徒向けの冊子、教員用の指導書および導入用の動画の 3 本立てで公開しています。ご希望の方には冊子を送付いたします。 問い合わせ先：広報部地球ひろば推進課 mptgp@jica.go.jp				

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格(税込)	出版日	関連 サイト
ひとことレビュー							
35 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」 アンゴラ	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
			〈アンゴラ編〉海辺に広がる大都会！石油とダイヤモンドの国の内線のきずあとと復興				
36 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」 ジブチ	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
			〈ジブチ編〉中東とアフリカ、アジアとヨーロッパをつなぐ「海上輸送の要」ジブチ！！				
37 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」 ベナン	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
			〈ベナン編〉行ってみたい！「ICT 産業」「観光産業」二つの顔を持つベナン！				
38 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」 南アフリカ	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
			〈南アフリカ編〉なぜラグビーが人々の心を熱くするのか。南アフリカが目指した「ワンチーム・ワンカントリー」とは？				
39 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」 南スーダン	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
			〈南スーダン〉武器ではなくスポーツで競いあうことを体験。若者が活躍する国へ！南スーダン共和国！				
40 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」 モザンビーク	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
			〈モザンビーク編〉日本との不思議な縁を結んだ海野シルクロード。織田信長の家臣、黒人の侍「弥助」はモザンビークの出身だった！？				
41 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」 リベリア	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
			〈リベリア編〉内戦やエボラウイルス、多くの困難に立ち向かう、たくましくリベリア。国民の平均年齢は19歳！！				
42 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」 ルワンダ	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
			〈ルワンダ編〉内戦を乗り越えて・・・ICTによる国づくりがぐんぐん進む「アフリカの奇跡」ルワンダ！				
43 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」 ウガンダ	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
			〈ウガンダ編〉「困ったときはお互い様」寛容な心を持った人々の国、ウガンダ！				
44 ※	教材・ 指導書・ 動画	「みんなが知らないアフリカのこと」 サントメ・プリンシペ	—	JICA アフリカ部	無料 (HP から DL)	2021年5月1日	  
			〈サントメ・プリンシペ編〉知る人ぞ知る幻の島。青い海に浮かぶ生き物の楽園！！				

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格 (税込)	出版日	関連 サイト
ひとことレビュー							
45	報告書・ ワーク シヨップ 集	学校や地域で活用できる! 多文化共生ワーク シヨップ集	JICA 横浜	—	無料 (HP から DL)		
			「多文化共生と移民」のテーマで実施した 2019 年度 JICA 横浜教師海外研修の参加者が、研修の一環として作成した参加型アクティビティ教材を掲載しています。国内事前・事後研修や、ブラジル連邦共和国での現地研修で学んだこと、気付いたこと、疑問に思ったことなどを基に作られたワークシヨップ集です。学校や地域で、多文化共生の環境づくりのために活用ください。				
46	報告書・ ワーク シヨップ 集	総合的な学習 (探究) の時間のアイデア集	JICA 東京	—	無料 (HP から DL)		
			総合的な学習 (探究) の時間で、国際理解教育 / 開発教育 / ESD をどのように進められるか、学習指導案・ポイントをまとめたアイデア集です。多文化共生の項目では、「難民」、「幸せの定義」、「隣の席の友達」などのテーマから多文化共生社会の実現をジブンゴトとして捉えるためのワークシヨップなどを紹介しています。				
47	報告書・ ワーク シヨップ 集	JICA 中国 開発教育 支援事業ー 20 年をふ りかえり、これからを 考える	JICA 中国	—	無料 (HP から DL)		
			JICA の開発教育支援事業 20 年をふりかえり、これまでの成果と課題を見つめ、今後の開発教育支援事業のあり方を考える機会として作成しました。中国センターにおける開発教育支援事業の実績や本事業を活用された先生方を対象に実施したアンケート結果、継続的に国際教育に取り組まれている先生方の寄稿文等が紹介されています。				
48	教材	多文化共生ってなんだ ろう? (本編)	JICA 九州	—	無料 (HP から DL)		
			同じ地域に暮らす外国人住民の存在をより身近に感じていただくことを目的に作成した教材です。本教材では、身近に起きているかもしれない問題をとりあげた 5 つのケーススタディと地域での取り組みや九州に多く住んでいる外国人の「国」について紹介しています。				
49	教材	多文化共生ってなんだ ろう? ～データブック～ (資料 集編)	JICA 九州	—	無料 (HP から DL)		
			「多文化共生ってなんだろう? (本編)」の別冊です。九州の外国人材に関する統計データや、九州各県での多文化共生に対する取り組み事例をまとめています。本編の参考資料としてご活用ください。				
50	教材 (紙芝居)	カリナのブラジルとニッポ ン	落合佳江子	—	JICA 横浜 海 外移住資料館 資料貸出		
			来日 5 年目、小学 6 年生の日系ブラジル人 3 世を主人公にした物語です。前半は、ブラジル移民の歴史、後半は主人公が現在抱えているの学校生活・家族の問題を実話をもとに描いています。				
51	教材 (紙芝居)	弁当からミックスプレ ー トへ	中山京子 / 森茂岳雄	—	JICA 横浜 海 外移住資料館 資料貸出		
			100 年以上前のハワイ生活、さとうきびプランテーション、様々な国からの移民との交流、ハワイの多文化社会、移民の食文化変容を日系移民史を通して描いています。				

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格 (税込)	出版日	関連 サイト
ひとことレビュー							
52	教材 (紙芝居)	ハワイにわたった日系 移民	中山京子 / 森茂岳雄	—	JICA 横浜 海 外移住資料館 資料貸出		
			ハワイへの移民体験を持つ祖母と小学生の主人公を描いています。ハワイ日系移民の戦前戦後のファミリーヒストリーを知ることができます。				
53	教材 (紙芝居)	海を渡った日本人	中山京子	—	JICA 横浜 海 外移住資料館 資料貸出		
			写真で日系移民の歴史全般を概説をしたものです。紙芝居の写真はすべて JICA 横浜にある海外移住資料館に展示してある物・写真です。				
54	教材	移民カルタ	—	—	JICA 横浜 海 外移住資料館 資料貸出		
			日本人の海外移住の歴史、移住者の生活や心情、日本に住む日系人の生活や思いなど、子どもたちにも知ってほしい移民に関する様々な事柄をかるたにしました。絵札の裏には読み札の解説がありますので、遊びを通して楽しみながら学ぶことができます。				
55	教材	日本-ブラジル移民カルタ	—	—	JICA 横浜 海 外移住資料館 資料貸出		
			日本の学校に多く在籍する日系ブラジル人児童生徒、教室内で彼らとともに学ぶ日本人児童生徒、ブラジルにおいて日本語を学習する生徒を対象として教材開発を行いました。日本語学習者はことばの獲得だけでなく、歴史や文化保持/変容を学びながらエスニック・アイデンティティを高めることができ、共に学ぶ日本人生徒は日系ブラジル人の友人の背景を理解することができます。				
56	教材	移民スゴロク	—	—	JICA 横浜 海 外移住資料館 資料貸出		
			4 択のクイズに答えながら、遊びを通して日本人のブラジル移住および移住一般に関して学ぶスゴロクを作成しました。日本から船に乗って出発し、長い航海の後ブラジルに到着、そしてブラジルでの生活になじんでいく、その体験をクイズで学べます。				
57	教材	いみんトランク	—	—	JICA 横浜 海 外移住資料館 資料貸出		
			移民に関する授業や事前学習をサポートする貸出教材です。国際的な人の移動から多文化共生を学ぶことのできる楽しい教材で、日本と世界をつなげたいとの思いから作られました。移住者の歴史や経験、貢献などにかかわるハンズ・オン教材や先生方向けの解説書などを多数取り揃えています。				
58	教材 (DVD)	Monica and Friends 日本とブラジル友情の絆	Mauricio de Sousa Productions Japan	—	JICA 横浜 海 外移住資料館 資料貸出		
			昔の日本人はどうして海外に移り住んだのか？移り住んだ先でどんな生活を送っていたのだろうか？まずは、ブラジル人の女の子モニカといっしょに移住の歴史を見てみよう！ (11分)				

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格 (税込)	出版日	関連 サイト
ひとことレビュー							
59	教材	教材で使えるショート映像集	JICA	—	無料 (HP から DL)		
			<p>中学・高校生が対象の教材です。JICA 事業の映像や、NHK や世界の報道映像及び独自のインタビュー映像を、授業でそのまま使えるよう再編集したアクティブラーニング用の映像教材です。「水と世界」「国際協力」「難民」「人間の安全保障」のテーマを、それぞれ数分にまとめました。</p>				
60	教材	つながる世界と日本	JICA	—	無料 (HP から DL)		
			<p>対象は小学校高学年～高校生です。途上国と日本とのつながり、世界共通の目標「SDGs」や国際協力について、クイズを交えながら分かりやすく紹介しています。</p>				
61	教材	共につくる 私たちの未来	JICA	—	無料 (HP から DL)		
			<p>SDGs の基本を、日本の国際協力や各国の子どもたちの紹介も交えて学べる教材です。各ゴールについて、関連データや最初の一步となる問いも掲載しており、学校などで SDGs を扱う際にそのまま活用できます。</p>				
62	教材	SDGs を学ぼう、SDGs で学ぼう!	JICA	—	無料 (HP から DL)		
			<p>JICA 地球ひろば作成の SDGs 関連教材を 1 冊にまとめた教材ガイドブック (DVD 付) です。授業で役立つ映像教材やアレンジして使えるデジタル教材をぜひご利用ください。</p>				
63	書籍	新大久保に生きる人びとの生活史——多文化共生に向けた大学生による社会調査実習の軌跡	箕曲在弘	明石書店	¥2,750	2022 年 3 月 31 日	
			<p>2000 年代韓流ブームに沸いた新大久保の街は、今や多国籍タウンへと変貌を遂げています。本書では、新大久保の概要をはじめ、そこで生活を営む外国ルーツの人々の生活史に着目します。12 名の当事者への大学生による聞き取り、さらには社会調査実習の授業実践ノウハウまでを網羅した素晴らしい一冊! (参照: 明石書店)</p>				
64	書籍	新版 日本の中の外国人学校	月刊イオ編集部	明石書店	¥1,760	2022 年 2 月 10 日	
			<p>日本の公立学校では包摂が困難な外国につながる児童生徒の教育を支え、引き受ける外国人学校。コロナ禍で生じた「教育の継続」などに関する新たな差別。子どもたちがアイデンティティを失わず日本社会で共生していくために奮闘する学校現場に迫ります。(参照: 明石書店)</p>				
65	書籍	外国人の子ども白書【第 2 版】——権利・貧困・教育・文化・国籍と共生の視点から	荒牧重人	明石書店	¥2,750	2022 年 2 月 25 日	
			<p>約 30 万人の外国籍の子どもたち。彼らは今、どのように生きているのだろうか……。現代日本における「外国につながる子ども」の現状と課題がわかる画期的な入門書。第 2 版では、新型コロナウイルスの拡大が外国人の子どもの生活に及ぼした影響、入管政策の変化など最新の情報に触れています。(参照: 明石書店)</p>				
66	書籍	わたしからはじまる! SDGs	川延昌弘 / 辰野まどか	風鳴舎	¥1,760	2022 年 6 月 27 日	
			<p>自分の好きや想いを SDGs とつなげて考えることが、自分や自分の周りの世界とつながるきっかけになるとしたら? 世界中の人とつながり、新しい未来をつくっていくためのツールとして SDGs を捉え、実際にアクションを起こせるようになる本です! 本書の sections2 では、ワークにもと取り組みます。探究学習・課題図書としても最適な一冊! (参照: 風鳴舎)</p>				

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格(税込)	出版日	関連 サイト
ひとことレビュー							
67	書籍	異文化間教育事典	異文化間教育事典	明石書店	¥4,180	2022年6月20日	
			異文化間教育学の「知」を結集した事典。異文化間教育の理論と方法、対象、領域の3部構成で、研究・実践において基礎となる幅広い204の重要項目を置いています。多文化化する社会における近年の課題や学問的な成果を取り上げ、今後の社会づくりの課題とヒントを示す一冊。(参照：明石書店)				
68	書籍	日本語×世界の課題を学ぶ 日本語でPEACE [Poverty 中上級]	奥野由紀子 / 小林明子	凡人社	¥2,640	2022年8月20日	
			日本語学習の中で、世界の問題のつながりに目を向け、自分ごととして捉えやすいように、「貧困」をテーマにより良い世界の実現について考えます。日本語と同時に世界の平和について学び、日本語能力だけではなく、深い思考力、互いを理解し協調していく力を身につけます。(参照：凡人社)				
69	書籍	事典持続可能な社会と教育	日本環境教育学会 日本国際理解教育学会	教育出版	¥3,080	2019年9月	
			現行の学習指導要領の前文には、「持続可能な社会の創り手」を育むことが明記された。予測不可能なこの世界において、持続可能な社会の構築のために、今、何をすべきなのかを[持続可能な社会の構築][社会的・文化的課題][地域をめぐる課題と取り組み][教育方法の革新]などの観点から考えます。「未来の教育」の姿を模索する人に読んでほしい一冊。(参照：教育出版)				
70	書籍	学校と博物館でつくる国際理解教育 新しい学びをデザインする	中牧弘允 / 森茂岳雄 / 多田孝志	明石書店	¥3,080	2019年8月1日	
			2002年の「総合的な学習の時間」の創設によって模索されるようになった、博物館と学校の連携。では、学校・博物館・学会の3者が連携・協働することでどのような学びが創造できるのだろうか。「新しい学びをデザインする」をテーマに、国立民族学博物館をフィールドにした総合的な学習の時間や社会科の授業実践の実例を紹介し、そこから見えてくる課題について検討します。(参照：明石書店)				
71	書籍	社会科における多文化教育 多様性・社会正義・公正を学ぶ	森茂岳雄 / 川崎誠司 / 桐谷正信 / 青木香代子	明石書店	¥2,970	2019年6月20日	
			多文化教育について、学校教育のカリキュラムにある社会科(地理・歴史・公民)に焦点を当て、その背景となる理論の検討と具体的な実践の分析、提案を行います。小中高での実践事例や北米の事例研究を収録した多文化社会における社会科のあり方を考える一冊です。(参照：明石書店)				
72	書籍	カラフルな学校づくり ESD実践と校長マインド	住田昌治	学文社	¥1,980	2019年1月15日	
			気合を入れてESDを実践するよりも、気付いたら実践していた・・・!じわじわと浸透していく学校、教員、子ども、保護者、地域の変容。横浜の普通の公立小学校が元気を取り戻していくその日常と学校づくりを住田校長が語ります。すべての教職員に読んでもらいたい公立小学校の挑戦を描きます。(参照：学文社)				
73	書籍	15歳からの世界のとびらの開き方ー自分の未来を変えるグローバル・シチズンシップー	辰野まどか	青春出版社	¥1,760	2025年7月23日	
			一歩踏み出したいけど、どこから始めていいかわからない中高大生へ。今からでもグローバルに挑戦したい20-30代、若者に世界を見せたい、自分も改めて扉を開きたい先生や保護者、社会人にも。『15歳から開く世界のとびら』は、世界と自分をつなぐ“最初の一歩”をサポートします。扉を開いていくワーク付きで「今すぐ一歩踏み出したくなるステップ」が、詰まっています。(参照：(一社)グローバル教育推進プロジェクト)				

教育現場で活用できるJICAのツール

国際理解教育／開発教育プログラム

教材

世界の現状や課題、国際協力などについて理解を深め、自分たちにできることを考え行動するために、映像教材、冊子教材、マンガ教材などを作成し無料で提供しています。授業に合わせてご利用ください！

申込・問い合わせ

人気冊子は「つながる世界と日本」です！



教員向け研修

国際理解教育／開発教育に関心のある先生方を対象に、途上国を訪問する「教師海外研修」、指導案の作成・授業実践のレベルアップに取り組む「指導者研修」等があります。各国内拠点でも独自の研修を実施しています。

各研修の募集案内

研修の種類によって対象者や目的が異なります！



国際協力出前講座

派遣中・帰国後のJICA海外協力隊やJICAスタッフの講義を、対面やオンラインで聞くことができます。体験談、異文化理解、国際協力キャリア、国際協力とSDGsなど、要望に沿った内容を組み立てます。

申込・問い合わせ



対面型は国内拠点HPへ！
オンライン型はこちらから→



イベント・セミナー

地球ひろばでは毎月さまざまイベントを実施しています。オンラインセミナーでは国際理解教育／開発教育の視点から「教室と世界をつなぐヒント」を皆さんと共に探っていきます。是非お気軽にご参加ください。

スケジュール

各国内拠点の地球ひろばも拡充中です。ご来訪をお待ちしています。

イベント
セミナー情報はこちらから→



教室と世界をつなぐ！オンライン出前講座の流れ

01
申込み



JICA HP「オンライン出前講座」の申込フォームから実施40日前までにお申込みください。

02
受付連絡



出前講座事務局担当者より、希望内容の聞き取りやオンライン環境実施の確認をします。

03
講師選定



希望の講座内容に合わせて、出前講座事務局が講師を選び打診します。

04
打合せ



講座内容について、講師と直接連絡を取ります。

05
講座実施！



出前講座事務局が音声確認などのテクニカルサポートとして当日立ち合います。

06
アンケート



講座実施後、アンケートのご協力をよろしくお願いいたします。

外国につながる児童・生徒に関連する情報

11か国を対象として、各国の教育制度・学校文化に関する調査を実施し、ガイド集としてとりまとめました！日本の学校の仕組みや文化を知っているだけでなく、子ども・保護者の出自国の制度や文化を知っており対比的に説明できることが、子どもたちの就学にあたって保護者への理解の大きな手助けになります。



教室と世界をつなぐ！

オンライン出前講座

開発途上国で国際協力に携わるJICA海外協力隊や
JICAスタッフ（職員・専門員・研修員など）を講師として紹介します。

対象

- 小・中・高校
特別支援学校
大学等の教育機関
- 一般、市民団体
など

内容例

- 国際協力体験談
- 途上国の生活や文化
- JICA事業紹介
- 国際協力という仕事
- SDGsと国際協力

費用

- 無料
- ※講師が派遣中の
JICA海外協力隊員や
JICAスタッフで、オンラ
イン開催の場合

教科での学習（総合的な学習の時間、社会、英語、道徳）、キャリア学習、テーマ学習等でご活用いただいています。

お申込み～実施までの流れ

1. JICA HP「オンライン出前講座」の申込フォーム（下記）からお申込みください。
2. (一社)多文化教育サポート国際協力出前講座担当より連絡、希望内容の聞き取り、オンライン実施環境の確認
3. 講師の選定
4. 講師と依頼元で内容や時間など詳細を調整
5. **オンライン出前講座実施**
6. 実施後、アンケートへのご協力をお願いいたします。

＼ 申込は40日前まで /

▼オンライン出前講座！お申し込みはこちら▼

<https://www.jica.go.jp/cooperation/see/delivery/online/index.html>





ご利用案内 (東京都新宿区市ヶ谷)

JICA地球ひろば



JICA地球ひろばは、市民による国際協力を推進するための拠点です。全国の学校からの訪問や国際協力に関するイベントへの参加など、2006年の設立以来累計で約**260万人**の市民のみなさまにご利用いただきました。



「途上国の現状や日本とのつながり、JICAの取り組みを紹介する【基本展示】と、世界を取り巻くさまざまなテーマを取り上げる【企画展示】を交互に開催しています。」

教育関係者のみなさまへ (プログラムのご案内)

開発途上国の現状や、地球が抱える課題、国際協力の実情などを、見て・聞いて・さわって体験できる展示と、案内人による途上国での活動体験談や開発教育教材を使った参加型学習(ワークショップ)など、ご要望に応じて組み合わせたプログラムを実施しています。修学旅行や社会科見学、総合学習等でぜひご利用ください。

対象 小学校高学年～社会人 **費用** 無料

人数 上限80名程度(応相談)

※こちらの見学プログラムは**事前予約**が必要です。



オンラインで展示見学

(JICA地球ひろばオンラインツアー)

体験ゾーンの体験型展示を見て回るオンラインツアー。オンラインで、どこからでも参加可能。授業や研修などの一環としてご利用ください。



3Dマップ



Point 1 見て・聞いて・触って学べる!

地球ひろばの展示品の多くは文字や写真を見るだけでなく、世界各地の挨拶を聞いたり、世界各地の民族衣装を着たり、民芸品に実際触れたり、香辛料の匂いを嗅いだりして、五感を通じて学ぶことができます。



(実際の展示品)

Point 2 地球案内人から世界の体験談を聞ける!

開発途上国で協力隊活動をした経験を持つ地球案内人が、現地での経験をお話します!



ぜひお越しください!

Point 3 食を通じて世界を感じる! J's Cafe

各国の大使館からレシピを提供いただき、『現地の味』とお墨付きを頂いたメニューをはじめ各国のエスニック料理を堪能できます!

(※平日のみ営業)



フェアトレード商品も販売しています!

【J's Cafe】(※平日のみ営業)

営業時間: 11:30-14:00

【体験ゾーン】

開館時間: 10:00-18:00

休館日: 毎月第1・3日曜日

※最新情報はWEBにて→

〒162-8433 東京都新宿区市ヶ谷本村町10-5 (JICA市ヶ谷ビル内)

☎ 03-3269-2911



アクセス



11 か国の教育制度・学校文化ガイド集

JICA 横浜では、東南アジア・南アジア・中南米各国のうち、神奈川県内の小中学校に多く在籍する 11 か国を対象として、各国の教育制度・学校文化に関する調査を実施し、ガイド集としてとりまとめました。

内容

教育制度

- 学校体系と取得可能な資格・学位
- 就学手続き・学校区域指定の有無
- 学校教育費
- 進学要件
- 障害のある子どもの就学

教育内容

- カリキュラムの特徴
- 教科
- 進級制度

● 算数カリキュラム

学校文化

- 1 年間の学校行事
- 1 日の流れ
- 学校のルール・習慣
- 学校生活に必要なもの
- 保護者の関わり



指導上の留意

<東南アジア 5 か国>



フィリピン



タイ



カンボジア



ラオス



ベトナム

<南アジア 4 か国>



バングラデシュ



ネパール



パキスタン



スリランカ

<中南米 2 か国>



ブラジル



ペルー

NEW!

日本語版に加えて、
各国語版が完成！

For each country, the information
is available in Japanese and **its**
native language!

SCAN ME!



お問い合わせ先

JICA横浜 市民参加協力課

電話：045-663-3253（代表） メール：yictp@jica.go.jp

[発行]

独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 広報部

地球ひろば推進課

TEL:03-3269-9022

〒 162-8433 東京都新宿区市谷本村町 10-5

[編集]

JICA 地球ひろば・教員向け研修運営事務局

一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト (GiFT)

E-mail : jica-edu@j-gift.org

TEL : 03-4577-6767

〒 108-0014 東京都港区芝 5 丁目 26-24 田町スクエア 2F

[発行] 2026 年 2 月